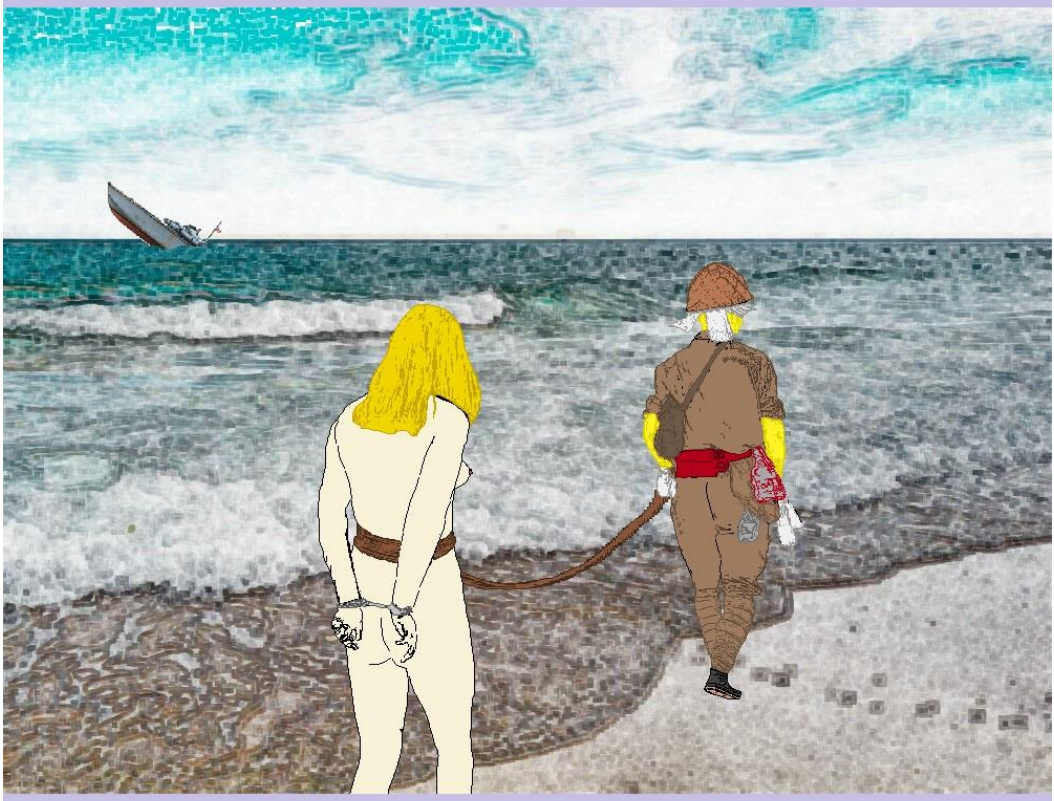
ヒロイン戦記：７

復讐の雷跡果てるとき



濠門長恭

目次

フィリピン撤退 - 2 -
ベニヤ板の悲劇 - 3 -
全裸尋問と凌辱 - 12 -
終わらない拷問 - 46 -
強制徴募慰安婦 - 66 -
苦痛とアクメと - 100 -
新たなる犠牲者 - 106 -
強制労働集団姦 - 123 -
脱走から反撃へ - 151 -
絶望の最大戦速 - 163 -
終章前の後書き - 168 -
処刑と生き地獄 - 170 -

フィリピン撤退

　フィリピン全土が日本軍の支配下に置かれたのは１９４２年６月であるが、その三か月前に司令官のダグラス・マッカーサーは魚雷艇部隊とともにフィリピンを脱出している。
　魚雷艇部隊のうち一区隊四隻は、遠距離哨戒の補給地であったバンダ海のタウェル島に常駐することとなった。ここをオーストラリア防衛の根拠地とするため、大型艦船の水路を確保すると同時に機雷原の設定が急がれていた。
　この物語は、まだ開発途上にあるデリケートな音響測深機（ソナー）の専門家であるピーター・オークリッジ（軍属）の一人娘、アンナに起きた悲劇を描いた架空戦記である。

　物語に登場する人物・組織・地名・年齢などは、すべて仮構である。また、物語に描写されている行為を現実世界で実行すれば、犯罪として糾弾されるであろう。
　なお、西暦１９４２年を舞台としているため、当時はふつうに使われていた差別用語などは、そのまま表記している。

注記
日本語表記の会話は、実際には英語です。
日本語による会話は「Rōma-ji hyouki to shimasu.」

ベニヤ板の悲劇

パパは大好きだけど、船酔いは苦手。だからアンナは父の助手として魚雷艇に乗るとき、ほとんどの時間を艦橋（操舵室）で過ごすようにしていた。高速で突き進む前方を眺めていると、左右に大きく分かれて砕ける波の男性的な美しさに見とれて、船酔いを忘れていられる。

でも今は、どうしても後ろを振り返ってしまう。水平線の彼方に五筋の煙が見えている。日本軍の兵員輸送船と護衛の駆逐艦だ。まだフィリピンを攻略中だというのに、さらに南まで侵略するなんて、食べきれないほど団栗を抱え込んでも満足せずに隣の樹にまで手を伸ばす猿そっくりだと、アンナは苦々しく思う。

彼らが目指しているのは魚雷艇補給地のタウェル島だ。連合軍にとって戦略の要衝であれば、それは日本軍にとっても同じだ。

ＰＢＹ（カタリナ）哨戒飛行艇が船団を発見したのは、五時間前。兵員輸送船二隻に駆逐艦が三隻も護衛についていた。こちらの戦力は、魚雷艇が三隻だけ（一隻は整備中）。悔しいけれど、撤退するしかない。敵の速力は、輸送船がせいぜい１５ノット。駆逐艦でも３５ノット。魚雷艇は４０ノットだから、本来なら追いつかれる心配はないのだけれど。

島に定住していた三十人ほどの民間人も、整備分隊の二十人も、総ざらえ。三隻の甲板は人と荷物であふれている。全速で走ると彼らがずぶ濡れになるから、２５ノットに抑えている。それでもだいじょうぶ。島から脱出したと知られていないのだから、駆逐艦が輸送船をほったらかして追いかけてくるはずもない。

男所帯に女の子がひとり。なので、あまりちやほやされたくなくてショートにしている金髪を後ろからの強風に吹き散らされながら、アンナは島に目を向けた。島に残っているブラム父娘が気がかりだった。トマス・ブラムさんは神父。娘さんのセシリアは修道女で

はないけれど、みんな（アンナ自身も含めて）からは、シスターと呼ばれている。軍属ではないけれど父の手助けをしているアンナと似ている。

数百人もの原住民を避難させるのは無理だし、当人たちも望まない。

「信徒を見捨てるわけにはいきません」

そう言われたら、まさか強引に拉致もできない。

島に多くの人たちが残るから、延焼を怖れて、基地を燃やすこともできなかったし、貯蔵してある燃料の放出もできない。ので、日本軍に使わせないように、水と砂糖をぶち込んでおいた。船台の上に残していく魚雷艇を壊して（艇体はベニヤ合板だから簡単）、配線と配管を何か所もで切断しておいたから、黄色い猿どもには修理できないだろ。

（……？）

アンナは目を凝らした。五筋の煙は昇るにつれて広がって薄くなり、空の青に紛れ込んでいるのだが――そのすこし上で、薄く横一線にわだかまっているように見えた。

その横一線が次第に濃くなり、小さな銀色の点に分かれていく。

「キャプテン、煙の上に何か見えます」

仕事の邪魔をしちゃ悪いかなと、アンナは遠慮がちに声をかけた。

ブキャナン大尉がアンナを振り返り、指差す方角へ目を向けた。数秒。ブキャナンが緊迫した声で無線士のヒューイに命令する。

「全艇に命令。敵機接近中。散開して１０ノットまで落とせ」

自分も舵輪に向き直って、テレグラフ（速度指示器）をチリリンチリンと動かす。

敵機と言われてみると、銀色の点は、たしかに飛行機を正面から見た姿をしている。

「なぜ、スピードを落とすんですか？」

戦艦でさえも飛行機に沈められる。魚雷艇なんかじゃ、かないっこない。

「ウェーキを引いていると、遠くからでも発見される。見つかれば、全速で逃げたところで追いつかれる」

魚雷艇が蹴立てた白い航跡は、すぐには消えない。つまり、ドタバタではなく忍び足で

逃げるということだ。
（どうか、見つかりませんように……）
　アンナの祈りが通じたわけではなく、最初からの作戦行動なのだろう。はっきり単発飛行機と見分けられるようになった大編隊は左へ――島へと進路を向けている。
　やがて、編隊の半分くらいが一列縦隊を作って、急降下していった。黒い小さな点が飛行機から分離して、地上へ吸い込まれて……幾つもの爆煙が噴き上がった。
（うわ……！）
　アンナは身を硬くして、煙を見守る。こうなったら、悔しいけれど、敵の技量が優れていることを――教会が誤爆されないことを祈るしかない。
「ジャップめ、とんだヘタクソだな。それとも……悪魔のような腕前なのか」
　舵輪を握ったまま島を振り返って、ブキャナンがつぶやいた。アンナの怪訝な顔に気づいて、つけ加える。
「火薬庫にも燃料タンクにも命中していない。もしかすると、対空砲陣地だけを精密に爆撃しているのかもしれない」
　上陸占領後に敵の資材を分捕る目論見なのだと、それはアンナにも理解できた。
「くそ！　見つかったか！」
　爆撃に加わらず島の上空を旋回していた編隊が、鋭く向きを変えて、こちらへ機首を向けた。
「ヒューイ。全艇に命令。全速で逃げろ」
　ブキャナンがマイクを握る。
「対空戦闘用意！」
　そこで声をやわらげて。
「甲板にいる皆さん。敵機の攻撃が予想されます。全速力で左右に舵を振るので、なにか固定物にしがみついていてください。荷物が波にさらわれても、けっして取り戻そうとはしないでください」

チリリン、チリン！

わずかなタイムラグがあって、エンジンが咆えた。１３５０馬力のエンジン三基が艇体を震わす。アンナがよろめいて手すりにしがみついたのは、加速のせいだけではなかった。それまでは波をかき分けて進んでいた魚雷艇が波に乗って、ぐんと艇首が持ち上がったからだ。

甲板よりも高く盛り上がる波を切り裂いて、魚雷艇が突進する。しかし、魚雷艇の４０ノットに対して敵機は１５０ノット以上。見る見るうちに迫ってくる。

「敵、正６時！　突っ込んでくる！」

甲板員の誰かが叫んだ。

ダダダダダダッ……

８０エリコンと連装５０ブローニングが一斉に火を吐いた。しかし火箭は敵機の手前で上下に分かれてしまう。

筆者注）

本作品では、航空機と艦船の速度はノット、艦船の排水量はトン単位としますが、その他の度量衡はポンド・ヤード法によります。銃砲の口径は単位を省略している場合、小数点以下の数値を意味します。したがって、８０口径は約２０mm、５０口径は１２．７mmとなります。後に出てくる３０３口径は7．７mmです。

アンナは身体を左へ振られて、いっそう強く手すりにしがみついた。直後、敵機が左へ流れて、敵機から放たれた火箭が艇をかすめた。

グオーンン！

敵機は黒い影となって、左前方へと飛び去った。ブキャナンの操船で間一髪を逃れたのだった。

しかし、右後方を走っていた艇は機銃弾の直撃を受けた。甲板にいた人たちの身体が千切れ飛び、割れたベニヤ合板が宙に飛散する。

「敵、８時！」

また、アンナは左へ振られた。魚雷艇は敵機に横腹を曝す方角へ旋回している。背中を見せて逃げるよりは、敵機に急旋回を強いる形になるので、これが正しい回避方法なのだが――アンナにとっては、急速に大きくなる敵機の黒い影を真横に見ることになる。

ガン！　ガン！　ガン！

グオーンン！

甲板に伏せていた人たちが、海老のように跳ねた。

がくんと、行き足が落ちた。

「やられたの……？！」

アンナはキャプテンを振り返り、またすぐ甲板の惨劇に目を引き戻される。

「かすり傷だ！」

チリリン、チリン！　チリリン、チリン！

エンジンが咳き込みながら咆える。しかし、もはや魚雷艇は滑走していない。瀕死の身体をもがくようにして、波をかき分けている。

「敵、６時！　９時！」

機銃は沈黙している。

ダン、ダン、ダン！

タタタタタタタタ！

敵機の銃撃はふたつの音が混じり合っている。

バリバリバリ……不気味な音が、むしろ振動として足に伝わった。艇の後ろ半分が折れ曲がった。船尾は海中に没しかけている。そして周囲には……何人もが浮かんでいた。俯せていたり仰向いていたり。意識を失っている。死んでいるとは考えたくない。

「駄目だ！　総員退避！」

キャプテンの怒号で、アンナは我に還った（のだろうか）。

「パパッ……！」

艦橋から下に通じるラッタルを駆け下りた。この魚雷艇にだけ特設された音響測深機の

狭い操作区画（ブース）に飛び込んだ。アンナが常に艦橋にいたように、父にとってはそこが安住の場所だった。

父は、動けない我が子をかばうような姿勢で、コンソールに突っ伏していた。上半身だけ。座っていたはずの椅子とそこにあった下半身は……薄いベニヤの艇体を貫通した２０mm炸裂弾に粉砕されたとまでは、アンナには分からない。理解できたのは、父が死んでいるという悪夢だけだった。

「パパ！　パパ……！」

父の上半身にすがりついたアンナは、後ろから強い力で引き剥がされた。

「諦めろ。早く脱出しないと、沈没に巻き込まれるぞ」

「いやよ！　パパも一緒に……！」

その後の数分間を、アンナは覚えていない。いくらかでも正気を取り戻したのは、生温かいとさえいえる海水に全身を浸したときだった。

ドゴオオオンンン！

ズウウンンン……！

ドッグワアアアン！

腹の底に衝撃を感じて、アンナは状況を把握できない。

「クソッたれ……！」

「ジーザス……！」

罵り声が周囲から聞こえた。

あたりを見回すと。キャプテンの大きな身体が視界の半分をふさいでいた。抱きかかえられている。音響測深機の部屋から引っ張り出して、もろとも海に飛び込んでくれたらしい。視界の半分には幾つかの頭が見えているのだが、アンナの視線は１マイルと離れていない海面から立ちのぼっている煙と炎とに吸い寄せられた。

「二隻とも急降下爆撃機にやられた。魚雷が誘爆したのかもしれん」

キャプテンが、事実とほぼ確実な推測を淡々と述べた。

アンナは、その続きを自分で組み立てた。魚雷は一発で何千トンもの巡洋艦を撃沈する。わずか５０トン（しかもベニヤ製）の魚雷艇なんか、木っ端微塵に消し飛ぶ。それに乗っていた人も巻き添えにして。

（それじゃ……）

うつ伏せに浮かんでいる人を数えなければ、見えている頭はわずかに八つ。魚雷艇乗組員の四十人と、整備兵二十人、そして島に住んでいた民間人の三十人。九十人以上の人たちの九割以上が、わずか数分のうちに殺されたのだ。

「イエロー・ジャップ……」

呪詛のつぶやきがアンナの口から漏れた。戦争で人が殺し合うのには、人種も国籍も関係がない――などとは、もしかすると頭で理解していたかもしれないが、彼女の魂には届かなかった。

「点呼を取る。ボースン？」

ブキャナンは副長の名を呼んだが、返事は無かった。

「ゴードン」

「イエッサー。背中の火傷に、海水が気持ちいいですぜ」

機関長の力強い冗談。

「スミス……ロブソン……アシュトン」

「アシュトンは重傷、意識不明。エドワースです」

キャプテンを含めて十名の乗員で生き残ったのは、四名だけだった。そして、アンナ。その他には整備兵が二名。便乗していた七名の民間人は全滅だった。

「クソッたれ。このまま野垂れ死にか」

「そうでもないぞ、ゴードン。お迎えが来そうだ」

ブキャナンが島の右手を指差した。五筋の煙から一筋が分かれて、他の煙より濃く太くなっている。

「こっちへ向かっているようだ」

父を同胞を殺戮した敵に救助されるのかと、アンナは憤慨した。

（あ、まさか……）

救助されるとは限らない。日本軍の残虐な行為は、いくつも耳にしていた。中国大陸で民間人を何万人も虐殺したとか。二月にマニラが占領されたときには、何十人もの女子学生が強姦されたそうだ。

生温かく感じていた海水が、急に冷たくなった。

「どうします？」

エドワースの質問は、アンナと同じ思考過程を経て発せられたのだろう。そうでなければ、遭難者は救助を待つしかないのだから。

「ジャップの海軍はイギリスの猿真似だそうだ。シーマンシップも受け継いでいてくれることを祈るしかないな」

島まで泳ぐという選択肢は無い。１マイルと行かないうちに、敵艦はここまで来るだろう。漂流物の陰に隠れて敵をやり過ごそうとしても、何人かは見つかるに決まっている。アシュトンは一刻も早い治療が必要だ。

悔しいけれど、父の仇の恩情にすがるしかない。海水に体温を奪われながら、アンナは怒りに身体を火照らせた。

――ブキャナンの祈りが天に通じたらしい。

一時間としないうちに駆逐艦が姿を現わして、ロープ付きの浮き輪を幾つも放り投げてくれた。さらにカッターが下ろされて、浮かんでいる人間も収容したのだった。甲板に引き上げられて、浮かんでいた人間は全員が死んでいると軍医が判断して、甲板に居合わせた水兵一同の挙手の礼に送られて再び海へ投げ込まれた。

死者に最低限の儀礼は尽くす姿に、アンナは黄色い猿をすこしは見直した。

負傷者は甲板上で手当てを受けた後に、重傷者以外はとひとまとめに、艦首の空き倉庫らしい小部屋に監禁された。七人だとぎゅう詰め。ずいぶんな仕打ちだとアンナは憤慨したが――戦闘艦艇に余分なスペースは無い。「快適なアパートメントは望めねえや」とは、

ゴードンの言葉だった。

総じて、捕虜たちは人間として扱われたといえるだろう。引き上げられてすぐに暖かい飲み物（薬草を煎じたみたいに渋かった）を与えられたし、濡れた衣服に替えて水兵の菜っ葉服を貸してくれた。男女を別々に収容するという配慮まではしてくれなかったので、アンナは着替えるのに（たとえ全員が背を向けてくれたにしても）羞ずかしい思いをしなければならなかった。もっとも、ただひとり別室に監禁されても、心細さに打ちひしがれる羽目に陥っただろうけれど。

人間扱いに関しては、トイレのエピソードも付け加えておこう。見張の兵に言葉は通じなかったが、立小便のジェスチャーをすると（アンナのときは、ゴードンが代行してくれた）トイレまで案内してくれた。黄色い猿が剥き出しの尻をくっつけた便器に座るのにアンナは抵抗を感じないでもなかったが、和式の便器を知らないのだから、そこに腰掛式の便器があることには疑念も驚きもなかった。かつて日本が諸外国に軍艦を発注して、当然だがトイレには洋式便器が設置されていて、それが伝統として受け継がれてきたと知れば、あらためて西欧人種の優越性を思ったかもしれない。

アンナたち七人は閉じ込められた後は尋問も受けず、ライスを丸めて塩をまぶした食事と泥水のような塩辛いスープを与えられただけで、さすがに毛布は貸してもらえたものの、不安な一夜を過ごすことになった。

その間、駆逐艦は大きく８の字を描くような哨戒行動を続けていたらしい。

夜が明けて、アンナたちは甲板に引き出された。すでに敵国海軍の菜っ葉服から、元の衣服に着替えている。靴は漂流中に泳ぎにくいので脱いでいたから、裸足だった。鉄甲板の冷たく硬い感触が不快だった。

駆逐艦は魚雷艇基地のすぐ外に停まっていた。錨は下ろしていない。

「きみたちは、陸軍の占領部隊に引き渡される。きみたちの基地であるから、復旧に協力してもらいたい」

将校の言葉にブキャナンが反駁した。
「捕虜を労務に就かせるのは、それが作戦行動に関与しない場合に限られる。基地の復旧は、明白なジュネーブ条約違反だ」
「だから、自発的な協力をお願いしている」
「利敵行為など、殺されても断わる」
敵の将校は（西欧人みたいに）肩をすくめた。
「その類の議論は、陸軍の司令官としてくれ」
将校は踵を返して。言葉の通じない兵隊たちに小突かれながら（他の六人が壁になってくれたので、アンナだけは被害を免れた）甲板に吊られたボートに乗せられて海へ下ろされ、筏のようなエンジン付きの船に乗せ換えられて、島へと運ばれた。
そうして、アンナの受難劇の幕が開く。

全裸尋問と凌辱

指揮所の建物（といっても、三十人収容の兵舎よりも小さなバラックだが）にはいつもの星条旗ではなく、血の染みのような赤い円を描いた旗が翻っている。国際信号旗の『１』ではない。たしか、日本の国旗だ。
建物へはアンナを除く六人が中へ引き入れられて、彼女だけは外で待たされた。
基地の中では黄色い肌をした兵隊たちが忙しく立ち働いているが、せいぜい百人といったところだ。
輸送艦は二隻だったから、まさかこれで全員ということはないだろう。残りの兵隊はどこにいるのだろう――という疑問は、すぐに解消された。基地に迫るジャングルの向こうで、樹木を伐採する斧の音が耳に突き刺さる。
飛行場を作っているのだと、アンナは推測した。連合軍は、この島をオーストラリアの

防衛線にしようとしていた。裏を返せば、攻略の最前線にもなる。飛行場があれば、空母を張り付けなくてもオーストラリア本土を爆撃できる。

しかしアンナは、同盟国が爆撃されるという未来の心配よりも、現在の居心地の悪さに悩まされていた。兵隊たちの視線である。指揮棟の横で見張の兵隊二人に挟まれて立っている白人娘は、通りすがりの兵隊たちの興味を惹くし、おそらく劣情を催させてもいるだろう。

(劣等人種に見詰められたからって、それがなんだというのよ)

そうは思っても、奴隷少年の前で平然と着替えをしていたという百年ばかり昔のお嬢様の心境には、とても達せなかった。だから、自分にも相手にも怒りが募る。

三十分ほどで、六人が出てきた。まわりを兵隊たちに囲まれて、整備棟へと向かっている。まさか、壊した魚雷艇を修理するんじゃないだろうかと考えて、整備棟の一画に営倉があったのを思い出した。整備兵が二十人しか常駐していなかった補給基地なのに、倉庫を改造したので十人くらいは収容できる。たしか、独房もあった。自分は女性だから、みんなと引き離されて独房に監禁されるかもしれない。でも、声の届く範囲に仲間がいるから心細くなんかない。

「Omae no ban da.」

「ひゃっ……」

尻を軽く叩かれて、アンナは悲鳴をあげた。

「なにをするの！　この……ジャップ！」

尻を叩いた兵隊はニタニタ嗤いながら、アンナの尻を押す。

(敵の陸軍はドイツをお手本にしてるって聞いた。キャベツ野郎の子分だけあるわね)

怒りを内向させて、尻を押されるままに歩くしかないアンナだった。

アンナが連行されたのは補給基地司令官の執務室だった。わずかひと晩で、室内の様子は様変わりしていた。壁には、赤い円から放射する筋が何本も描かれた大きな旗が貼り付けられ、機密書類を根こそぎ持ち出した書棚には敵の書類が乱雑に積まれている。

なによりも、部屋の主人が変わっている。カーキ色の粗末な軍服に、やたらと略章を飾り立てた、アンナとあまり背丈の変わらない黄色い猿。そのボス猿を取り巻く二人の若い雄猿たち。

アンナは、ボス猿がふんぞり返っているデスクの前に座らされた。

「おまえの名前は？」

二本の赤筋に星二つの階級章（若いから中尉だろうと、アンナは見当をつけた）を襟に縫い付けた男が、わりと流暢な英語でアンナに尋ねた。デスマスクのような無表情。声にも抑揚が乏しい。

「アンナ・オークリッジ」

戦時捕虜は姓名や階級を偽ってはならない。これは、民間人にも適用されるはずだとアンナは考えた。

「おまえは兵士かね？」

「違います。民間人です」

中尉がボス猿を振り返って、アンナの答を通訳する。ボス猿が中尉に指示を与えた。

「おまえの年齢は？」

答える義務はあるのだろうかと考えたが、答えない理由も思いつかなかった。つまらないことで逆らって、相手を怒らせるのは得策ではない。アンナは正直に答えた。

「Ketou wa hatsuiku ga hayai na. Hatachi wa itteru to omotte otta. Souka, humm...」

なぜか、ボス猿が下卑た嗤いの形に唇をゆがめた。

「Kūnyan towa hitoaji chigau jinmon ga dekisou dana. Wakatte oruna chūi. Koyatsu wa zettaini spy dazo.」

アンナには、スパイという単語だけが理解できた。軍服を着ずに戦闘行為をすれば、ゲリラかスパイと断じられるのは、戦場の常識だ。

中尉が尋問を続ける。

「民間人のおまえが、なぜ魚雷艇に乗っていたのだ？」
「あなたたちから逃げるためです」
「きみの家族は一緒だったのかね？」
「父がいました。あなたたちに殺されました！」
　アンナの糾弾は中尉もボス猿も素通りする。
「きみの父親は兵士だったのかね？」
「軍属でした」
　質問が重ねられて、アンナは正直に答えていった。戦闘行為もスパイ行為もしていないのだから、隠したり嘘をつけば、かえって疑われると考えた。決まっている結論に導くための誘導尋問とは気づかずに――父が音響測深機の技術者であり、アンナも測定の手伝いをしていたことまで自白したのだった。
「海図の作成は軍事行為だ。民間人でありながら、その手伝いをしていたおまえはスパイということになる」
　中尉が平板な発音で断罪した。
「スパイは裁判無しで死刑に処してもかまわないのだ。おまえは、スパイ行為をはたらいていたと認めるのだな？」
「認めません！」
　認めれば処刑されるのだから、そう答えるしかなかった。
「あたしは機械の理屈も測定結果をどう海図に落とすのかも知らずに、ただオシロスコープを読んでいただけです」
「スパイではないと主張するんだな？」
「あたしはスパイなんかじゃないです」
　中尉がうなずいた。アンナではなく、ボス猿に向かって。
「立て」
　言葉と同時に、中尉がアンナの髪をつかんで椅子からごぼう抜きにした。

「痛い！　言われれば立ちます」

「そうか。では、両手を後ろにまわせ」

厭な予感しかしなかったけれど、逆らえば腕をひねり上げられるだろう。おずおずと後ろへまわした。

「Nishi, koitsu wo kousoku shiro.」

それまですこし離れた位置に立っていた兵隊が、アンナの背後に動いた。

ガチャ……

冷たい感触が、アンナの手首を噛んだ。

「なにをしたの……？！」

質問ではなく抗議だった。なにをされたかは、分かりきっている。手錠を掛けられたのだ。後ろ手錠なんて、文明国家では男の凶悪犯にしか使われない拘束だった。

「はずしなさい。こんな扱いを受ける理由がありません！」

屈辱が怒りになって噴き出る。

しかし、軍服を着た猿どもはせせら嗤っている。

部屋の隅に丸められていたロープをつかんで、ボス猿がデスクの上に立った。剥き出しの梁にロープを掛けて――その先を、中尉がアンナの首に巻いた。

（絞首刑……！）

怒りが恐怖の前に立ち消えた。

しかし猿どもの目論見は、ずっと淫湿だった。ロープは、首を絞めない程度に引かれて。アンナはその場に立ったまま動けなくなった。

「Taishita ama dana. Inochi-goi dokoroka niramitsuke oru.」

ボス猿が愉快そうに唇を歪めた。

「Koredemo goujou wo hatte irareru kana?」

ボス猿がアンナのワンピースに両手を掛けた。

言葉は分からなくても、相手の悪意は伝わる。なにをされるかも、見当はつく。しかし、

猿にも等しい劣等人種に憐れみを乞ったりはしない。気丈に睨みつけている。

ぴいいいっ……

ワンピースが小さな悲鳴をあげて、まっぷたつに引き裂かれた。

「Hun, taishita tama dana.」

ボス猿がシュミーズの胸元をつかんで引き千切る。

「女を辱めれば嘘の自白でもすると思っているの。野蛮人の考えそうなことだわ」

アンナは、ボス猿ではなく中尉を罵った。

中尉は通訳せずに、ただ首を横に振っただけだった。しかし、アンナがボス猿の意図を悟ったように、ボス猿もアンナの言葉に込められた敵意を読み取った。

いっそう乱暴な手つきでブラジャーを引っ張る。背中のホックが弾けて、未性熟だがじゅうぶんに弾力のある乳房が白日に曝される。

「Yohodo eiyou wo tsukete oruna. Kūnyan towa hari mo ookisa mo chigau.」

ボス猿が両手で双つの乳房をわしづかみにして、パン生地をこねるようにひねりまわす。

「くっ……」

肌に奔るおぞましさと内側にまで突き抜ける激痛とに、アンナは歯を食い縛った。やめてとは言わない。言えば猿を悦ばせるだけ、いっそう強く揉みしだかれるだけだと、本能的に悟っている。

ボス猿は左手で乳房を握りつぶしたまま、右手を最後の一枚に掛けた。

「野蛮人……こんなことで屈したりするもんですか」

敢えて言葉にしなければ、屈してしまいそうだった。アンナは気力を振り絞って目の前のボス猿を睨みつける。

「Iizo...Dokomademo goujou wo hatte iro.」

パンティがアンナに代わって抗議の悲鳴をあげた。

さすがにアンナは、身をよじって股間を敵の視線から隠そうとした。手錠に腕の動きを遮られてバランスを崩し、上体が泳いだ。途端に首を絞められて――とっさに脚を踏ん張

って体勢を立て直したが。おとなしく立っているよりも余計に、猿どもの目を愉しませる結果になってしまった。

「Hum...Shita mo kami to onaji kin-iro ka.」

淫裂の上半分だけをささやかに覆っている飾り毛を指差して、ボス猿が揶揄する。

そのわずかな指の動きが、アンナの羞恥を呼び起こす。

(こいつらは猿だ。猫に裸を見られるほうが、よっぽど羞ずかしいわよ)

それは差別感情というよりは、羞恥への叱責だった。

しかし股間に手を這わされては、反射的に飛びすさって首を絞められ――さっきよりも激しく、恥辱のダンスを踊ってしまった。

首のロープを緩めるにはボス猿に近寄って、しかもまっすぐに立たなければならない。結果として、待ち受けている掌に下腹部を押しつける形になる。

「く……」

アンナは爪先立って、その分だけ腰を引いた。しかし、無駄な努力だった。いや、かえって悪い結果につながった。

「痛うっ……!」

股間の奥に鋭い痛みを感じて、アンナはわずかだが悲鳴を漏らしてしまった。

「N...nn?」

指がいっそう侵入してきて、さらに中を掻きまわした。

「やめて……痛い……」

ついに、アンナは蔑んでいる生き物に向かって懇願した。

訴えが通じたのか、指が引き抜かれた。

ボス猿は先端が薄赤く染まった指を目の前にかざして、驚いたような悦んでいるような表情を浮かべた。中尉を振り返る。

「Odoroitana, kimusume da. Kūnyan nara tokkuni otoko wo kuwaekonde iru tos higoro dazo.」

「Tairiku towa wake ga chigaimasu. Honpou demo jogakusei wa teitei shojo desuyo.」
「Kisama, yamato-nadeshiko to Shirouma wo isshokuta ni suruna.」
「Kūnyan mo kono musume mo tekisei-minkanjin desuna.」
「Kisama, ninshiki ga amaina. Koyatsu wa spy dazo.」
ボス猿がアンナに向き直って、言葉を続ける。
「Dakara kibishiku torishirabeneba naran.」
不意打ちにアンナの腹に拳を突き入れた。
「んぐっ……！」
アンナの膝が砕けて、首のロープが絞まる。
「げふっ……ぶふうう」
逆流した胃液が喉でつかえて、あやうく吸い込みそうになった。
激しく咳き込みながら、アンナはかろうじて体勢を立て直した。腹の痛みをかばって腰を折り曲げ、爪先立ちで首を絞められる苦しさとバランスをとった。
ボス猿がゆっくりと部屋の隅へ動いた。アンナへの加虐を中断したわけではない。角に立てかけてあった竹刀を手にする。捕虜の少女をどう扱うか最初から決めていて、その小道具まで準備してあった――とは、アンナには思い及ばない。
「Maruyama-chūi, kisama niwa ushiro wo makaseru. Taikaku de zonbun ni uchi suete yare.」
ボス猿が、竹刀をゆっくりとアンナの乳房に向けて突き出す。
すでにロープで首を絞められているアンナは逃れようもなく、乳房をつつかれるにまかせるしかない。竹刀から目を離せないでいるうちに、通訳の中尉がズボンのベルトを引き抜いてバックルを握りしめたのには気づいていない。
ボス猿が竹刀を引いて、片手で水平に構えた。
「おまえはスパイだな？」

背後から平板な声。

「ノー」

パシイン！

間髪を入れぬタイミングで、乳房に竹刀が叩きつけられた。

「きゃああっ……！」

悲鳴に合わせるように、スープカップほどに盛り上がっている乳房が激しく揺れた。

「Maruyama-chūi, yaranka!」

竹刀から逃れようと後ずさったところに……

バチイン！

ベルトが尻を打ち据えた。

「くうっ……」

乳房に比べれば、尻への打撃などたかが知れている。それに――ボス猿が目をぎらつかせているのに対して、崩れかけたバランスを取り戻すときに一瞬だけ後方が視界にはいったのだけれど、中尉は無表情だった。しいていえば、苦々しい色がわずかにうかがえた。

ちなみに丸山中尉は野戦憲兵分隊の長であり、アンナがボス猿に見立てている男――連隊長の直接の部下ではない。英語を流暢に操ることからも、彼の教養が推し量れる。教養と性癖とになんら相関はないとしても。

一方の連隊長は大陸を歴戦した猛者であり、みずから豪語するとおり、姑娘に（ごく控えめに表現しても）不埒な振る舞いに及ぶこと屢々（しばしば）であった。無学で強者に媚びへつらう、ややもすると栄養不良の農民娘に比して、強い自我と健康的な肉体とを備えた白馬（しろうま）は、嗜虐の好餌ではあっただろう。白馬とは、白人種への劣等感を裏返した蔑称である。

「Maruyama-chūi, motto kiai wo irete utanka.」

中尉が無言でベルトを振るった。

バッチインン！

「きひいっ……！」

反射的にアンナが前へたたらを踏んだところに、竹刀が襲い掛かる。

パシイン！

「かはっ……！」

激痛に息を詰まらせるアンナ。

パシイン！

バッチインン！

バシン！

バッチインン！

前後から同時に竹刀とベルトを浴びせられ、アンナは進退きわまって棒立ち。打たれるたびに、全身がびくんびくんと揺れている。

「おまえはスパイだな？」

打擲の嵐が焉んで、首吊り同然になっているアンナに、気乗り薄な質問が発せられる。

本人が自白しようとしまいとスパイと決めつけて処刑してしまえば、それで事は終わる。そうしないのは連隊長の淫虐だと、中尉も理解して――辟易しているのかもしれない。

「……ノー」

アンナの答えに、ためらいが生じた。こんなに叩かれたのは、生まれて初めての体験だった。苦痛が気力を奪い、否定するかぎり拷問は続くと悟って――いっそ、認めてしまおうかと迷った。身の潔白がどうこうではなく、劣等人種に屈する恥辱が、気力を振り絞った「ノー」を言わせたのだった。

「Goujouna musume da. Mochitto kibishiku korashimete yarou.」

ボス猿が二本目のロープを手に取った。しゃがみ込んで、アンナの右足首に巻き付けた――そのとき。

「Tekki hakken! Nan'nantō! ikki!」

外で誰かが怒鳴った。

ボス猿は弾かれたように窓の外を振り返って。すぐに落ち着きを取り戻すと、アンナの

首を絞めているロープの結び目に手を触れて緩んでいないのを確かめてから、部屋を出て行った。丸山中尉は大慌てでズボンのベルトを締め直して、部下の兵隊と一緒に後を追う。

「Tekki, massugu chikazuku!」

「Taikuu-sentou Yohhhi!」

飛び交う怒号が遠くに聞こえた。

アンナはようやくまっすぐに立って、肩で大きく息をしている。

やがて。エンジンの唸りがかすかに聞こえてきた。アンナは音だけでカタリナ飛行艇だと判別した。オーストラリア本土から偵察に来たのだ。

エンジン音がだんだん大きくなり……

ドーンン！

ドーンン！

高射砲の発射音が部屋を震わせ、肌に響く。

十秒か三十秒か。対空機銃が加わって、射撃のシンフォニーがクライマックスに達する。

ドンドンドンドン……

ドーンン！

ドンドンドンドン……

そして、とどめを刺すように。

グワワーン！

グワワーン！

バラックがビリビリ震えた。カタリナの爆撃だ。偵察機だが、何発か小型爆弾を搭載している。

（いっそ……ここに命中したら、いいのに！）

痛いのは一瞬だろう。パパのところへ行ける。殺された八十人の仲間と再会できる。卑しい猿どもに辱められるよりは、ずっと幸せだ。

しかし、アンナの自暴自棄の願いは叶えられなかった。爆弾は、たぶん基地の近くに落

ちただけだった。

ぱたっと射撃音が途絶えて、アンナは真空の中に取り残された。のは、せいぜい数分。ドアを開けて、三匹の猿どもが戻ってきた。

「Hetakuso dana. Juppatsu mo baramakiotte ippatsu mo ataran.」

「Prince of Wales eno meichūritsu wa go-wari ni tassita soudesu.」

「Rikugun nara zendan-meichū sasetoru.」

戦闘で緊張していたボス猿の顔は、アンナの裸身を見たとたんに緩んだ。

「Atoshimatsu ga sumu made jinmon wa oazuke dana. Shikasi uchikata-yōi dakewa shite okuka.」

ボス猿が中尉に命じて、アンナの右足首に巻かれたままになっているロープを天井の梁に掛けさせた。

「Gokaichou to ikuzo.」

ボス猿がロープの端を引っ張った。アンナの右足が吊り上げられる。

「ああっ……やめて！　いやああ！」

抵抗はできない。どころか、バランスを崩して転倒しないためには、自分から右脚を上げて小刻みにジャンプしながら上体を右へ倒すしかなかった。

「いやあ……痛い」

直立したまま開脚して股間の奥まで曝け出す羞ずかしさと、限界を超えて股関節を広げられる痛みとに、アンナは涙をこぼした。

いっそ、左脚で踏ん張るのをやめたらとも、考えた。片脚で宙吊りになってしまう。そのショックで脱臼するかもしれないし、首を巻いているロープで窒息する危険もあった。

迷っているうちに手錠を片方ずつはずされて、左右をつなぐ鎖を右足首のロープに絡められてしまった。上半身が右脚に密着して、まったく動けなくなった。左足を床から離したら、どうなるか分からない。

アンナは脚をＩの字形に百八十度開いて、上げた右脚に上体を添わせるポーズで固定さ

れてしまった。

ボス猿が身体を寄せてきて。股間を掌でぽんぽんと叩いた。

「……！」

ハンマーで殴られたような衝撃と、巨大なナメクジに這いまわられる感触とが、誰にも触られたことのない乙女の中芯を襲った。おぞましさに、アンナは身体を硬くするだけで、言葉を失ってしまう。

「Mekosuji ni shinai wo tatakikonde yaruzo. Tanoshimi ni matte ore.」

日本語を幾らかでも知っていたら、アンナは恐怖に泣き叫んでいただろう。それとも、あくまで気丈にボス猿を睨みつけただろうか。

それから二時間ほどを、アンナは執務室の片隅に片足で立たされ続けた。ボス猿がデスクに陣取って、なにか書き物を始めた。中尉とその部下はいなくなったが、下級将校や伝令兵がひっきりなしに訪れる。

たいていの者は驚いた顔になって、あわてて目を逸らすのだが。

「Kamawan. Zikkurito mite yare. Hakujin-musume no shojo-meko dazo. Hanashi no tane...dewa naina, senzuri no tane ni manako ni yakitsukete oke.」

けしかけられて。上官の命令に忠実に、将兵たちはアンナの股間を覗き込む。ズボンにテントを張る者も少なくなかった。

「Uhee! Pakkuri to kuchi wo akete orimasu desu.」

「Okuni shiroi watakuzu no youna mono ga miemasu. Shojo-maku deshouka?」

本心六割お追従四割といったところか、あれこれ感想を述べる者もいた。

「Taihen na gampuku wo sasete itadakimashita. Arigatoh gozaimasu.」

馬鹿正直な奴もいた。

からかわれている、自分の肢体（それ以上の具体的な表現はできなかった）が猿どもに劣情を催させているとは、アンナにも分かる。

（猿になにを見られたって、羞ずかしくなんかないんだから……！）

硬く目を閉じて、そう自分を叱責することで、アンナは羞恥を克服しようとした。しかし、男に見られているという意識を払拭できるはずもなく――羞恥は肉体に微妙な変化をもたらしてしまう。

「Numenume to hikatte orimasu. Mirarete kōfun shite irunodeshouka?」

「Hitomae de heizen to kiss wo suru renchū da. Inran ni kimattoru.」

とんでもない部位を間近に見つめられて。アンナは恥辱を重ねながらも、自分の肉体（の一部）の変化に戸惑ってもいた。それが性的な反応だとも知らずに。知っていたら自己嫌悪にまみれていただろうけれど。

やがて、けたたましくラッパが鳴り響いて。時間経過からして、正午を告げているのだろうとは、アンナにも見当がついた。

尋問のときとは違う兵隊が、アルミ製らしいトレーで食事を運んできた。そのまま、デスクの横に直立不動。

日本軍独特の従卒制度を知らないアンナは、彼がなにをするのかと、屈辱と苦痛の中に新たな不安を芽生えさせた。

アンナの不安は、このボス猿に限っては的外れでもなかった。

子分猿がトレーから白い塊を取り上げてアンナに近づいた。ライスボールだった。それをアンナの口元に突きつける。食べろというのだろう。トーストのような香ばしい匂いはしない。わずかに甘ったるいけれど菓子類とも違うエキゾチックな匂い。

アンナは、今朝からなにも食べていないことを思い出した。とたんに空腹感に襲われた。昨夜もあてがわれたライスボールは、やたらと口の中でねちゃねちゃして塩辛いだけだったけれど。それでも食べたい。けれど……相手の手中にある『餌』にかぶりつくなんて、あたしは獣じゃない。

アンナは未練を残しながらも、ぷいっと顔をそむけた。

「Tairyoku wo tsukete okanaito kitsuizo. Rentaichō-dono no seme wa kibishi

i karana.」

「Murijii wa suruna. Kono hanappasira no tsuyoi Shirouma ni izure wa tabem ono wo megunde kudasaito dogeza sasete yaru.」

子分猿が引き下がった。アンナに見せつけながら、さもうまそうにライスボールをかじる。

アンナに与えられた『餌』に比べて、ボス猿の昼食はアメリカ軍のそれよりも豪華だった。部屋の隅でアクロバティックな佇立を強いられているアンナのところまで漂ってくる匂いでビーフとわかるステーキと、付け合わせの温野菜。日本独特の泥水スープと炊いた米。デザートに黄色いスポンジケーキも添えられている。

しかし食事マナーは、見られたものではなかった。ステーキを細かく切り刻んでから、フォークではなく二本の細い棒でつまんで、ろくに咀嚼もせず、次々と口に放り込む。カップスープを手に持って、二本の細い棒でかき混ぜながら、ずるずると音を立てて啜りこむ。その合間に、炊いた米をこれも二本の細い棒で口へ運ぶ。

子分猿と会話を交わすこともなく、せいぜい十五分くらいでデザートまで食べ終えてしまった。

子分猿がトレーを持って退出すると、食後の一服を吸いながら、さっさと書類仕事を始める。なんともあわただしい有り様だった。

そうしてボス猿は書類の山を片付けて――捻り出した時間いっぱいを使ってアンナを甚振りにかかるのだった。

竹刀を手に、Ｉ字バランスを強いられているアンナの正面に立つ。開脚の中芯にぴたぴたと竹刀を当てる。

「やめなさい」

憤慨が頭の中で渦巻くが、うまく言葉にできない。言葉にしたところで、ボス猿には通じないだろうけれど。

これは取り調べなんかじゃない。通訳の中尉がいないから、いやらしい責めに屈してス

パイだと認めたとしても、こいつには通じない。だから、これは拷問でさえない。では、なにを……？

「Kimusume tonaruto tsuki wa mottainai na.」

ボス猿が後ろに下がって間合いを取った。右手一本で竹刀を握って、斜め下に構える。

「Mekoh!」

裏返ったような気合声とともに、竹刀を斜め上に撥ね上げた。

ぱしいん！

竹刀の先端から三分の一あたりが淫裂を打ち据える。

「ぎゃはあああっ！」

凄まじい衝撃が股間で爆発して、脊髄を通って脳天まで突き抜けた。

反射的に股間をかばおうと左脚を縮めて――アンナの裸身が宙に浮いた。わずかに左へ傾いたところで重心が安定して。まだ首に掛かったままになっているロープは緩んだままだった。アンナはいっそう脚を縮めて、必死に股間を護ろうとする。

なにを思ったか、ボス猿が室内を見回す。

「Kodera. Baketsu to renga wo motte koi.」

ドアを開けて呼ばわる。

一分としないうちにノックの音がして、中尉とその部下が姿を現わした。

「Jinmon wo saikai sareruno deshitara yonde itadakitai desu.」

ボス猿は顎で「はいれ」とうながしただけだった。

少し遅れて、従卒がバケツと数個の煉瓦を持ってきた。

ボス猿が煉瓦を入れたバケツを、アンナの自由な左足にロープで結びつける。従卒に命じず自分で手を下すあたり、この男の嗜虐への執着がうかがえる。アンナをさらに吊り上げるのは、従卒と憲兵中尉の部下にやらせたが。

煉瓦の重みで、アンナの左脚が伸び切った。力を入れれば縮められなくもないが、一分とは保てない。

ボス猿に命じられて、渋々といった態で中尉が形ばかりの尋問を始める。

「おまえはスパイだな。否定するなら竹の刀(bamboo sword)でおまえの女性器を叩くと、連隊長殿は言っておられる」

「……」

アンナは絶望の中で、しかし中尉を睨みつける。スパイと認めたら処刑される。認めなければ拷問される。いや……認めなければ、認めるまで拷問されて処刑されるだけではないだろうか。それくらいなら、いっそ……

ボス猿は沈黙を否定と解釈したのだろう。

「Mekoh!」

竹刀を正面に構えるなり、肩の高さまで吊り上げられたアンナの股間に振り下ろした。

ぱっしいん！

下から斬り上げるよりも強い打撃が、女芯を打ち据えた。

「ぎゃはっ……！」

悲鳴が大きすぎて喉につかえる。アンナは大きく口を開けたまま息を詰まらせた。

「Mekoh!」

二撃目がアンナを襲う。

「……あああああっ！」

強引に悲鳴を吐かされた。

「Amari kowasarenai uchini kono musume wo okari shite yoroshii deshouka.」

中尉が、ボス猿の蛮虐を諌めるでもなく切り出した。

「An...?」

「Rentaichō-dono ga meijirareta Suirai-tei no shūri desuga, hei-domo no te ni wa oemasen. Horyo ni kyouryoku saseru niwa on'na no buji wo misete yara neba naran nodesu.」

ふたりはさらに会話を重ねて、中尉の要求が通ったようだった。

アンナは屈辱の片脚吊りから下ろされて、手錠もはずされた。まだ激しく痛む股間を両手で押さえて床にうずくまった彼女の前に、女物の衣服が投げられた。島から脱出するときに残してきた自身の普段着だった。

「それを着るのだ」

与えられたのは上着だけだった。下着を要求をする気力は、アンナには無かった。アンナは床に広がったワンピースを拾い上げると、首まわりを足に通そうとした。が、思うように足を動かせない。小さな子供が母親に着せてもらうみたいに、スカートのほうから頭にかぶって引き下げた。

「立て」

黄色い猿に命令されるのは不快だったが、反抗すれば何をされるかわかったものじゃない。恥辱と苦痛の片脚吊りは、二度と御免だった。けれど、股関節に痛みが走って、うまく立てない。

中尉の部下がアンナの二の腕をつかみ、腋の下を持ち上げて立たせた。そのまま、部屋から引きずり出そうとする。

立たされてみると、下半身が痺れてはいるものの、どうにか歩けた。

両手を前でそろえて手錠を掛けられ腰にロープを巻かれて、指揮棟から文字通りに引き出され、裸足で基地の中を歩く。兵隊は、まばら。突貫工事で据え付けた高射砲や対空機銃のまわりにたむろしている。その連中の視線が、アンナに浴びせられる。まるで珍しい生き物を眺めるような目つきなのだが、粘りつくような肌触りさえ感じられた。それが若い娘に向けられた剥き出しの劣情だとは、そういった経験のないアンナにはわからない。ただ、猿どもにじろじろ見詰められる不快感だけ。

アンナが連行されたのは、基地のはずれにある整備棟だった。正確には、その脇の倉庫のひとつを改造した営倉。

その手前で引き止められて、中尉から脅された。

「捕虜が抵抗したら、その場で射殺されても文句は言えない。おまえたち西洋人は、レデ

ィファーストとか騎士道精神とか、女のことになると無分別になる」
　なにを言い出すのかと、アンナは中尉を見詰めた。
「ああ……つまりだな」
　中尉がアンナに向かって手を伸ばして、いきなり乳房を握った。
「やめて！」
　身を引こうとしたが、後ろから羽交い絞めにされた。
「Tsuide ni chichi wo monde yare.」
　数秒は、なにも起きなかった。が、アンナを羽交い絞めにしている兵隊に向かって中尉がうなずくと――アンナの腋の下に入れられていた腕がすこし緩んで、その手が乳房を（それでも遠慮がちに）揉み始めた。
「やめなさい。この……ジャップ！」
　ぱちん。左の頬に軽い痛みがはしった。屈辱は、その数倍。
「おまえが、このように扱われていると知れば、捕虜どもは逆上するだろう。騎士道精神を発揮して、射殺されることになる。分かるか？」
　全裸にされて屈辱的な姿勢で吊るされて竹の棒で股間を叩かれたなんてことを訴えれば――そういうことだと、アンナは悟った。こんなまわりくどいやり方をするのは、「口止めなんかしていない」というアリバイ作りなのだろう。
「卑怯者……」
　アンナは、中尉の顔に唾を吐き掛けたい衝動をかろうじて抑えた。
「よろしい。では、仲間たちに会わせてやる」
　四人分のベッドと簡易トイレのある雑居房に、六人が押し込められていた。空きスペースはじゅうぶんにあるから、駆逐艦の狭い倉庫に監禁されていたときよりは、ずっと快適そうだ。
　雑居房からキャプテンのブキャナンが引き出されて、廊下でアンナと対面した。
「なんてことだ。こんなか弱い娘に手錠を掛けるとは」

唯一英語の通じる中尉に向かって語気を荒げるブキャナン。

「捕虜を野放しにするほど、帝国陸軍の規律は緩んでいない」

ブキャナンは顔を真っ赤にして中尉を睨みつけていたが、じきに血の気は引いた。アンナに向かって問い掛ける。

「ひどいことは、されていないか？」

アンナは、首を横に振るしかない。けれど、どうしても怒りを抑えられない。

「ジャップどもは親切です。千切れて着られなくなった衣類(clothes)の代わりに、この服(a dress)を与えてくれました。元々、あたしの服ですけどね」

衣類には下着も含まれているが、単数形の服はワンピースだけを指す。そのニュアンスは通じたようだ。なぜ、元の衣類が着られなくなるまでに千切れてしまったのかも、正しく想像したかもしれない。彼が平静を装おうと努力しているのが、アンナにも分かった。

ブキャナンが当然の要求を持ち出す。

「彼女は民間人だ。釈放してもらいたい。教会の神父なら、身元引受人になってくれるはずだ」

「それはできない。この娘は民間人でありながら、軍属である父親の海図作成を手伝っていたと自白した。スパイ行為だ」

日本人の英語はイントネーションに乏しいが、それを割り引いても平板な中尉の言葉だった。

「スパイだと。馬鹿な……」

「スパイは即座に処刑してもかまわない」

激高に平板をおおいかぶせる中尉。

「この娘を生かしておきたければ、捕虜のおまえたちも応分の誠意を発揮してもらいたい」

「……あの魚雷艇を修理しろと言うのだな？」

「そうだ。時速七十キロも出る舟艇は、貴重な海上戦力になる。利敵行為など、おまえたちにとっては、とんでもないことだろうが」

たっぷり三十秒、ブキャナンは中尉を真正面から見詰めていた。そして、目を伏せる。
「分かった。協力する。その代わり、アンナを俺たちに還してくれ」
「まさか。男女を同じ部屋に入れるなど、そんな不道徳なことはできない。娘は、別の場所で手厚く保護しておく」
手厚(gentle)くではなく手酷(terrible)くだろうとは、ブキャナンにも容易に想像がついただろう。女性の衣服を「千切れて着られなく」する連中なのだ。ほんとうにそこまでで済んだのかとも疑っているに違いない。しかし、ブキャナンは無言でうなずいただけだった。そして、アンナに（ぎくしゃくと）微笑みかける。
「まるきり、ソープオペラのヒロインだな。エンディングまで頑張れよ」
「なんのことだ？」
中尉に尋ねられて、ブキャナンが真面目くさって答える。ステイツで放映されている安直なメロドラマ（ｏｐｅｒａ）は、たいてい石鹸（ｓｏａｐ）会社がスポンサーになっている、と。
「敵に捕らえられたお姫様は、まさしくソープオペラのヒロインだからな」
「アメリカンジョークというわけか。のんきなものだ」
ブキャナンは雑居房に戻され、アンナは外へ連れ出された。
指揮棟へ戻される短いあいだに、アンナは激しい自己嫌悪にまみれていた。駆逐艦よりも早く走り、一発で大型艦を沈める魚雷を四本も搭載した魚雷艇。それを日本軍に献上しなければならなくなったのは……アンナのせいだった。
けれど。ブキャナンの謎めいた言葉も気がかりだった。なんで、あんな場面でソープオペラなんかにたとえたんだろう。幸せだったヒロインに災難が降りかかって酷い目に遭って、でも最後は絶対に幸せを取り戻す。分かりきった筋書き。
（あっ……？！）
そうだ。最後はハッピーエンドだ。必ず助けるから、エンディングまで頑張れ。ブキャナンは、そう言いたかったのだと――アンナは思い至った。でも、すくなくと一個大隊以

上の敵軍に捕らわれた六人に、なにができるんだろう。気休めではないのかしら。
（違う……！）
ブキャナン大尉は責任感の強い人だ。いい加減なことは言わない。具体的な（アンナを含めての）脱走計画があるんだ。それを信じようと思うアンナだった。
しかし、その希望は……執務室に連れ戻されて、すぐに打ち砕かれた。
そこにはボス猿だけでなく、胸の徽章から幹部と分かる連中が四人もアンナを待っていた。会議でもするつもりか、部屋の中央に据えられた大きなテーブルを囲んでいる。その他に、部屋の隅で直立不動の兵隊がひとり。連隊長の給仕をしていた若い猿だ。
アンナと、彼女を連行した憲兵中尉とその部下。全部で九人。数人のブリーフィングくらいしか見込んでいない部屋だから、人があふれかえっている。
若い兵隊に、ボス猿が命じる。
「Korekara jūyōna kaigi wo hiraku. Kesshite yojin wo ireruna.」
若い兵隊が敬礼をして部屋から出て行った。
前手錠を掛けられて佇立するアンナにボス猿が近づく。ワンピースの胸元に手を掛ける。
アンナは、負けてたまるかとばかりに睨み返している。
「Hun...」
ぴいいいっという悲鳴とともに、ワンピースが胸から腰まで一気に引き裂かれた。
（まだ、ブラウスとスカートのセットが二組は残っていたはず……）
羞恥を無視しようとしてそんなことを考え――あと二回は、この辱めに甘んじるのかと、かえって屈辱を深めるアンナ。
「Table ni nosero.」
中尉と部下がアンナを担ぎ上げて、テーブルに仰臥させた。
「なにをするの……？！」
アンナは、ひどく嫌な予感に襲われながら抗議した。
手錠がはずされて、かえって戸惑うアンナだったが、その手をつかまれて左右に引っ張

られると、嫌な予感がさらに濃くなった。

さらに。両足をつかまれて、尻がテーブルの縁に掛かるまで身体をずらされた。足首にロープを巻かれてテーブルの脚に縛りつけられる。両手も広げたままテーブルの脚につながれた。展翅された蝶のようなポーズ。開脚した中芯では、もっとも羞ずかしい部位が剥き出しになっている。

（羞ずかしくなんかない！　相手は黄色い猿どもだ）

それを自分に言い聞かせなければならないとは、つまり無意識下では相手を人間だと認めている――などと、アンナはとうてい承服できないだろうけれど。

アンナの尻が両側から持ち上げられて、デスクの下にあった足置台が押し込まれた。アンナの裸身は弓ぞりになって、ますます羞恥の部位を突き出すポーズを強制される。

「Dewa hatsumono wo itadakuto suruka.」

ボス猿が、徽章をごてごてと飾った上衣を脱ぎ、さらにズボンまで脱ぎ捨てた。

それを横目でちらっと眺めて、あわててアンナは目をそらした。細長い布のようなもので包まれた股間は、異様に盛り上がっていた。それが何であるかは、処女でも知っている。そして、これから自分の身に起きる悲劇も正確に予測できた。

ボス猿が股間の布をずらして、醜悪な器官を露出させた。

「チュウイ。この男がしようとしていることは、相手が軍人であろうと民間人であろうと、けっして許されることではありません」

毅然と冷静に――努めようとしたが、声が裏返っていた。

ボス猿がアンナの展翅された脚のあいだに腰を進める。三本の指をすぼめて口に含み、唾をまぶす。

「やめなさい。やめて……いやああああっ！」

生温かく濡れた感触に股間を襲われて、アンナはついに悲鳴をあげた。

濡れている感触が、股間を這いまわるだけではない。自分でも明確には形状を把握していない肉の襞をつままれ、こねくられて。さらに奥まで指が侵入してきた。

軽く引き攣れるような痛みがあった。

「やめて！　お願い！　あたし……まだ、処女なんです！」

「Sakkikara kyankyan urusai. Nani wo wameitoru noda?」

視線をアンナの股間に落としたまま、ボス猿が中尉に尋ねる。

「Jibun wa shojo dato jiman shite orimasu.」

上級者へのおもねりがあからさまな説明だった。

「Ketou dake atte haji-shirazu dana.」

強制的に開かされている肉襞に、ボス猿が勃起の先端をあてがった。じわあっと腰を突き出す。

指とは違って、太くて熱いボス猿の肉体が押し入ってくる。アンナは、身体をまっぷたつにされるような鋭い痛みに襲われた。まさに、処女が奪われようとしている。

「やめて！　こんなことをする権利は、おまえになんか無い。やめなさい、この……黄色いチビ猿……いやあああっ！」

ずんっと一気に刺し貫かれて、びききっと股の奥を引き裂かれる激痛に、アンナは絶叫した。性的興奮どころか、恐怖と嫌悪とに委縮しきって、わずかに唾で潤滑されただけの膣穴に、硬く太い肉棒を無理矢理に押し込まれ、処女膜を破られる。考えられるかぎり最悪のおぞましいロストバージンだと、アンナは絶望した。絶望と劣等人種への侮蔑とが綯い交ざって、激しい怒りが噴き上げるのだが、それも――鋭い激痛に圧倒されてしまう。

ボス猿がアンナにおおいかぶさり、両手で乳房をつかんだ。体重を乗せ掛けて押し潰しながら、股間を前後に動かし始めた。

「痛い……お願い、やめて。痛い……！」

懇願が通じるとは、アンナも思っていない。しかし、激しく揺れ動く痛みが、そのまま言葉となって漏れ出るのだった。

十回二十回と股間にボス猿の腰を打ちつけられるうちに、切り裂かれるような鋭い痛みが鈍く分厚い痛みに変化していった。アンナの感覚が麻痺したのではない。

「Dandan guai ga yokunatte kita. Shukketsu ga meko-jiru no kawari da.」

いっそのこと殺してほしいとさえ、アンナは願った。日本女性なら、あるいは舌を噛み切って――それくらいでは絶命せず、いっそう苦しむことになっていただろう。しかしアンナは、雲の上に鎮座する白髪の老人なんか信じていなくても、自殺への禁忌は確固と植え付けられている。相手を挑発して殺されるように仕向けるのは……生きたまま、もっと酷い目に遭わされるだけだろう。女性器を凶器で叩くような狂人なのだから。

アンナにできることは、目を閉じ歯を食い縛って、凌辱の嵐が通り過ぎるのを待つだけだった。

それは五分だったろうか十分だったろうか。アンナにとっては何時間にも思える苦痛の果てに、ボス猿は肉の凶器をアンナから抜去した。

しかし、暴行劇は第一幕が終わったに過ぎない。

「Rentaichō-dono. Jibun mo hatsumono wo itadaite yoroshii desyouka.」

ボス猿の振る舞いを真面目くさった顔で見物していた子分猿の一匹が、直立不動の姿勢でお伺いを立てた。

「Ann? Nani wo ittoru?」

「Tsumari...Zenmon no tora, Koumon no ookami deshite...」

「Souieba kisama wa ochigo-shumi dattana. On'na aite demo nanoka. Kamawan, don'na hūni yarunoka, kougaku no tame ni misete moraou.」

アンナには、要するに『猿ども』でしかないが。この男は歩兵大隊長の中佐だった。テーブルを取り巻く他の三人は、工兵中隊長、野砲中隊長、高射砲中隊長。この島に駐屯する及川連隊（及川久三大佐）麾下の実戦部隊長の勢ぞろいだった。アンナを使って穴兄弟の契りを交わそうという、たしかに重要な会議ではあった。違う穴を使うやつもいるが。

これだけの顔触れが集まるのなら、参謀将校が同席してしかるべきだが、この場にはいなかった。平素は顔を突き合わせている連中は抜きにして、実戦部隊長との親睦（というよりも、同じ穴の狢）を深めようという意図なのか、陸軍大学校を優秀な成績で卒業して

経歴の過半を内地勤務で過ごしてきたエリート連中とは反りが合わないのか――それは、定かではない。

ともあれ、この手の色事なり荒事は、戦場にしても現地娘にしても経験豊富な猛者連中の好むところではあっただろう。

連隊長の許しを得た歩兵大隊長、アンナの感覚ではボス猿よりひとまわり大きな筆頭子分猿は、アンナの足を縛っているロープをほどいた。アンナが脚を閉じる隙を与えず、両足首をつかんで百八十度に折り曲げ、アンナの手を縛りつけているテーブルの脚に結び直した。

アンナは気づかないが、肛門までが猿というよりも野獣どもの目に曝されている。

筆頭子分猿が、蹂躙されたばかりの割れ目に指を突っ込んで、血と精液とが混ざった粘液を掬い取る。

強姦に比べればたいした苦痛ではないが、恥辱は変わらない。

（この部屋にいる全員に……あたしは犯されるんだ）

あらためて、そのことに気づいて――目を開けているのに視界が暗転する。しかし、絶望のどん底に安住することすら許されない。

「ひゃあっ……」

思ってもいなかった部位を指でこねくられて、アンナは素っ頓狂な悲鳴をあげた。

こねくられるだけでなく、中にまで侵入してくる。犯されたばかりの部位で感じたとは色合いの異なる、内臓をさらに上へと押し込まれているような痛みがあった。

いったい、この猿はなにをするつもりなのだろうと、アンナは訝しんでいる。『ソドムの罪』という言葉は耳にしていても、それが具体的にどういう行為かは、大人の誰に質問しても答えてもらえない。だから、筆頭子分猿が勃起を肛門に押しつけてきたときでも、悪ふざけの延長か、たんに場所を間違えているかくらいにしか思わなかった。

ぐううっと肛門を圧迫されても、まだ相手の意図に気づかない。

「いやあっ！　そこ、違う。やめて……！」

「Bī rirakkusu. oa, pein hādo.」

力を抜かないと、すごく痛い。そう言っているのだと、アンナは気づいた。こいつは、中尉猿ほどではないが、英語（もどき）を喋れる。そして、穴を間違えているのではない。

（あああっ……？！）

『ソドムの罪』がどういう行為か、アンナは卒然と理解した。

「駄目！　やめて！　神様への冒涜です！」

言葉を理解しているのかいないのか、筆頭子分猿はますます強く、肉の凶器を肛門に押しつけてくる。

「くうう……」

アンナは肛門を引き締めて、凶器の侵入を拒もうとする。

猿の手が動いて、アンナの下腹部に触れた。直後……まだ強姦の痛みが疼いているすこし上のあたりに、痛いような痺れるような甘酸っぱいような、わけの分からない衝撃が奔った。

「ひゃんっ……ひぎ゛い゛い゛い゛っ！」

括約筋が緩んだ瞬間、灼熱の激痛が肛門を引き裂いた。

「うあああああ……痛い！　熱い！」

強引に拡張される鋭い痛みの中に、別の感覚が生じた。便秘のつらさと似ているだろうか。下腹部をのっぺらぼうの不快感が遡っていく。怒張したペニスを腸の奥まで突き進められているのだと、理解してしまう。

灼熱の激痛が脈動を始めた。腰全体に伝わってくる相手の動きで、女性器を犯すときと同じようにペニスを出し入れしているのだと分かった。とすると――やはり、行為が終わるまで屈辱と激痛とに耐えるしかないのだろうか。

ボス猿と違って、この猿はなかなか動きを止めなかった。腸の中は緊縮に乏しく、それだけペニスへの性感が小さい――などとは、アンナには分からない。

「Mada den’noka. Yahari meko no houga guai yokarou.」

ボス猿に声を掛けられて、筆頭子分猿が動きを止めた。ずぼっと怒張を引き抜いて、苦笑いする――のまでは、アンナには見えていない。死角になっているというよりも、涙で視界がぐちゃぐちゃになっている。

筆頭子分猿が、部屋の隅に放り投げられているアンナの千切れた衣類を拾い上げて、欲望を遂げていない怒張を入念に拭う。布が赤茶けた汚物にまみれる。汚れた部分を内側に丸め込んで、アンナの尻も拭いた。

乱暴にこすられて、アンナはわずかに顔をしかめたが――これまでの暴辱に比べたら、嗚咽にも抗議にも値しない瑣末事にすぎない。

筆頭子分猿はボス猿の穢した跡始末もしたが、布の綺麗な部分を使うだけの分別はあった。

「Rentaichō-dono. Jibun mo hatsumono wo itadakitaku arimasu.」

別の子分猿が申し出る。

「Souka, ana wa mou hitotsu attana. Kyoka suru.」

その子分猿は、もう一匹に手伝わせて、アンナの脚を元の磔の姿に戻した。ただし、裸身をずり上げて、テーブルの角に首が乗るようにした。髪をつかんでのけぞらせ、頬を万力のように締め付ける。

「Ōpun mausu. Nebā baito. Ihu baito, ai kurasshu yua tsūsu.」

口を開けろ。噛むと歯を壊す。ブロークンでも意味は分かった。そして……肛門を女性器と同じように犯された体験が、これから加えられる凌辱がどのようなものか、アンナに教えた。猿に等しい劣等人種の肉体を口に突っ込まれるなど、考えただけで吐き気がする。しかも、突っ込まれるのは指なんかではない。醜悪で不潔な男性器なのだ。

のけぞったアンナの顔に、勃起したペニスが突きつけられる。高射砲のように上向こうとするそれを左手で押し下げているのまで、はっきり見えた。

アンナは口を固く閉じて、相手を（顔が仰向けになっているので）下目遣いにうかがう。脅されれば屈服するしかないが、素直に口を開けるのは絶対に肯んじられない。

子分猿はさらにペニスを押し下げてアンナの唇に押し当て、ペニスを押さえている手を使って鼻を摘まんだ。

「……！」

息をするために口を開けるのを待っている――だけでは、なかった。自由なほうの右手で、アンナの乳房を握りつぶす。爪を食い込ませて、ぎりぎりとひねる。

その苦痛が、アンナの無駄なプライドを捨てさせた。口を開けると、たちまちペニスが押し入ってくる。交換条件みたいに、乳房と鼻が解放された。もっとも、わずかでも息を吸えば獣じみた体臭を嗅がされるから、アンナはまだ呼吸を止めている。

生温かく表面に弾力を伴った剛直が、アンナの口の中で動き始めた。

「んぶ……ぶふうう……」

喉の奥を突かれて吐き気が込み上げる。顔に淫嚢がぺちぺちと当たる。目を閉じると、口中のおぞましい肉棒に、いっそう意識が集中してしまう。

鼻で呼吸したくないので、何度目かに肉棒が歯の裏側あたりまで引き抜かれたとき、アンナは大きく口を開けて息を吸った。

「はぶ……ぶふうう」

口の開け方が足りなかったのか、自らペニスを吸い込むみたいになってしまった。口を通して、鼻の奥に腐ったチーズのような異臭が浸透する。あわてて鼻から息を吹くと、鼻腔を雄猿の剛毛がくすぐって……くしゃみをしてしまった。

「Uwotto...」

不意にペニスが抜去されたのは、くしゃみの反動で噛まれるのを恐れたせいだろう。

ふたたび口元にペニスを突きつけられたとき、苦痛と引き換えに数秒の拒否を貫く意思は、すでにアンナにはなかった。

延々と――処女を奪われたときよりも長く、口唇への蹂躙は続いた。

「Sakku... Ēto... peropero...」

子分猿が、もどかし気に命じる。

サックは……吸え(suck)という意味だろうか。ペロペロは分からないが……ああ、そうかと、アンナは理解した。口の中は腸よりも広い。括約筋も無い。女が積極的に舌を使うとかしなければ、男は性感を得られないのかもしれない。

もちろん、協力するつもりなんかないけれど。脅かされたら従うしかない。でも……ろくに言葉が通じないのに、どうやって命令するつもりなんだろうか。

アンナは口を開けたまま、じっとしていた。全軍退却中に、ぽつんと孤塁を守っているような、ささやかな抵抗だった。

子分猿は、それ以上の要求をしなかった。両手でアンナの髪をつかんで頭を固定し、腰を前後左右上下に乱暴に動かし始めた。

「うぶ……げふっ……ぶええ」

喉の奥だけでなく、頬の裏側も舌も上顎も、激しくこすられ突かれ抉られる。

「ぐぶっ……」

ついにアンナは吐いてしまった。朝から何も食べていないので、胃液だけが逆流して口からこぼれ、頭を下にされているので鼻に入って、激しく噎せてしまった。

子分猿は、今度は引き抜かなかった。アンナが咳き込み唇を震わせるのを性感に取り込んで――アンナの喉奥に淫欲をぶち撒けた。

子分猿は身を引いて、無表情にアンナを見下ろしている。

アンナは喉に絡まった粘っこい精液に悶え苦しみながら、子分猿から冷たい敵意のようなものを感じていた。

射精直後の男は虚脱し、あるいは相手の女に憐憫なり愛惜なりを感じるのがふつうだとは、アンナは知らない。ただ……自分が女として扱われないときは、憎悪すべき敵国人として見られているのだとは直感できた。いや、女は女でも、なにをしても（殺してさえも）かまわない敵国の女として扱われているという、それはすでに厭というほど身体に叩きこまれていた。

アンナの苦悶が治まったと見るや、四匹目の猿が襲い掛かってきた。

「Yahari on'na wa bobo de arimasuna. Osoreōkumo rentaichō-dono to kyoudai ni narasete itadakimasu.」

テーブルの端から腰が突き出るまでアンナの裸身をずらして、のしかかってくる。

強引に腕を引き伸ばされて肩に痛みを感じたが、そんなことはどうでもよかった。ふたたび女性器を犯される恥辱にも、アンナは悲しみの呻きすら漏らさなかった。

五匹目の猿も、四匹目と同じように女性器を蹂躙した。いきなり三回も犯され、しかも肛門も口唇もとなると、それだけでも処女には筆舌に尽くしがたい苦痛であり屈辱だったろう。さらに、執務室には二匹の猿が控えていたのだが。

「Iye, pēpē no chūi gotoki ga rentaichō-dono to ana-kyoudai ni naru nado, amarini osore-ookute.」

連隊長の大佐と比べればそういう話になるが、三人の中隊長は大尉――憲兵中尉とはひとつした階級が違わない。インテリ中尉としては、大陸での蛮行を白人相手に繰り返そうとする猛者どもに、含むところがあるのだろう。もっとも、アンナへの仕打ちを見れば、たとえ連隊長の指示であったとしても、同じ穴の貉ではあろうが。

アンナへの輪姦は（今日のところは）終わったが、しかし虐待はさらに続いた。

下半身に暴行の残滓をこびりつかせ、口も拭えず、まして着替えなど与えられないまま、アンナは執務室の隅に正座させられた。後ろ手錠を掛けられ、天井の梁から垂らしたロープに手錠をつながれた。上体を前傾させて両腕は斜め上に引き上げられ、立ち上がれないように太腿と脛を左右別々にロープで縛られた。正座の習慣がないアンナには、それだけで厳しい拷問だった。しかも、膝の間に水を張ったバケツを置かれた。脚を閉じて股間を隠すことができないうえに、大量の水を目の前にして口が届かない。羞恥責めでもあり飢渇拷問でもあった。

ボス猿はアンナに背を向けて書類仕事をしたり、ほんとうに必要なのか部下に目の保養をさせるつもりなのか、頻繁に人を出入りさせ、気分転換とばかりに竹刀で股間をくじっ

たり。

休憩に煙草を吸うときなど、わざわざアンナを振り返って、その白い肌と煙草の火口とを交互に眺める。乳房や性器を焼いて存分に喚かせてやりたいが、火傷だらけでは部下どもが食指を動かさなくなるだろうと、この男なりに自制している――などとは、アンナには想像もつかないことではあった。

足が痺れても、わずかな動きがボス猿に新たな嗜虐を思いつかせるのではないかと、アンナはひたすらに耐えた。外に用事があってボス猿がいなくなったときには、左右に体重を移し替えたり、肩の痛みをこらえて前傾姿勢を深くしたり。

そして、不吉なことばかりを考えてしまう。

なぜ、ボス猿と中尉はスパイ行為を自白させようとするのだろうか。その気になれば、銃殺でも絞首刑でもすぐに実行できる。ということは――アンナを殺すつもりが無いのだ。

アンナの命と引き換えに、猿どもは捕虜に利敵行為を強いている。すくなくとも、魚雷艇の修理が終わるまでは殺されないだろう。それはしかし、明日も（おそらく明後日も）凌辱が繰り返されることを意味する。

もしも、またブキャナンさんに会えたら、修理不可能なまでに魚雷艇を壊してくださいと頼もう。でも……。

日本軍の残虐行為は、広く知られている。ナンキンという中国の大都市では、非戦闘員が何万人と殺戮されたらしい。フィリピンの各地でも、女学校が襲われたとか、投降した兵隊を処刑したとか……。ブキャナン、ゴードン、ＥＥ（エリック・エドワース）、マイヤー、そして整備兵の二人。彼らをそんな目に遭わせないためには、あたしが口をつぐんでいなければならないのかもしれない。竹の棒で殴られベルトで鞭打たれお腹にパンチを叩きこまれて……何匹もの獣に女として辱められても。

しかしアンナは。より過酷で恥辱的な被虐に晒されるとは、思ってもいない。この半日で加えられた凌辱が、すでに彼女の想像力の限界を上まわっていたのだから。

そうして。

アンナには握り飯を用意してやりもせず、従卒にかしずかれながら健啖ぶりを発揮したボス猿が、執務室の隣にある寝室に姿を消してから数時間もすると、新たな恥辱が忍び寄ってきた。

――窓から差し込む月明かりの中で、アンナは開いた脚の間に置かれたバケツを両膝で締め付けて、それでも足りずに腰をもじつかせていた。

尿意だった。朝起きてから一度もトイレに行っていない。もしかすると、拷問されているときや輪姦されているときに失禁していたかもしれないけれど。一滴の水も与えられていなくて喉がひりついているのが、むしろ救いになっているけれど――それにしても、限界はとっくに越えている。

赤ん坊でもあるまいし。犬や猫だって、自分で決めた場所に排泄するというのに。お漏らしなんて、恥辱以外のなにものでもない。まして、それを黄色い猿どもに見られたら、神の雷(いかずち)が我が身に降(くだ)ることを祈るしかなくなる。

それとも。小便まみれの小娘を犯そうとは、さすがに考えなくなるだろうか。

(違う……)

アンナは、ぶるっと頭を振った。排泄物を溜めた穴にまで肉体の一部を平然と突っ込むような、本物の猿だってしないことをやってのけるやつらだ。

アンナは渾身の力でバケツを脚の間に締め付け、下腹部に力を入れた。けれど、ますます尿意は激しくなる。とても、明日の朝まで我慢できそうにない。

意を決して、アンナは声をあげた。

「レンタイチョウドノ！　助けてください(help me)」

寝室に人の動く気配はなかった。二度、三度と繰り返して、だんだん声が大きくなる。

寝室ではなく廊下に通じるほうのドアが開いて、若い兵隊が中を覗いた。

「Urusai. Shizuka ni shiro!」

ボス猿を起こさないように気を遣っているのか小声だったが、叱られているのはアンナにも分かった。

「便所、お願いです」(Toilet please)

若い兵隊が部屋にはいってきて、アンナの前に立った。無言で見下ろして、それでは足りずに腰をかがめて、アンナの乳房を覗き込む。

「便所、お願いです」

アンナが要求を繰り返したとき、寝室のドアが開いて、足首まである薄いガウンのような服を着たボス猿が姿を現わした。

「Yonaka ni sawagaserunja nai. Damarasero.」

「Hai. Desuga, dōshite yoika jibun niwa wakaranainode arimasu.」

ボス猿は、立て掛けてあった竹刀を手に取って、アンナの下腹部に押しつけた。

「Kou surunoda.」

英語を理解しなくても、アンナの切迫はじゅうぶんに予想がつく。ボス猿は、もっとも手っ取り早い解決策を強制した。

強い力で切っ先を押し込まれて――アンナは、かすかに尿を漏らしてしまったのを感じた。いったん決壊した堤防は、一気に水をあふれさせる。

「あ……いやあああ！」

悲鳴とともに股間から水が迸った。ぶじゃあああ――と、板張りの床に水音が響いた。

ボス猿はせせら嗤いながら、若い兵隊は目を丸くして、白人少女の粗相を眺めている。

三十秒ほども続いた水音が止まっても、アンナの嗚咽は続く。

「Korede shizukani naru.」

ボス猿は、アンナが膝で挟んでいるバケツを取り上げて――頭から水を浴びせた。

「Atoshimatsu wa omae ga shite yare. Yuka wa mochiron daga, koitsu no kara da mo kokoroyuku made huite yare. Imi wa wakaruna?」

「Hai! Arigatou gozaimasu.」

他人の粗相の跡始末を命じられたというのに、若い兵隊は張り切って返事をして、感謝の言葉まで口にした。

ボス猿は、ずぶ濡れのアンナの裸身を満足そうに眺めてから、寝室へ引き上げた。

若い兵隊は忍び足の小走りで執務室を飛び出して、雑巾を何枚か持ってきた。床に広がった水を数分で拭き取り。それからたっぷり二十分くらいは使って、アンナの全身を拭ったのだった。特定の部位だけをとくに丹念に、最後には雑巾を使わず素手で。

アンナは抗議の声もあげず、若い兵隊の弄辱に身を委ねていたのだった。微妙な部分をこねくられて不本意な吐息を漏らす場面はあったけれど。

終わらない拷問

恥辱と恐怖と憤怒にまみれて、アンナは眠れない一夜を苦しみ続けた。肉体も精神も疲れ果てて浅い微睡に引き込まれかけると、不自然に傾けている上体が動く。身体が倒れかけると肩が下がるので、いっそう腕をねじ上げられる。逆に身体を起こそうとしても後ろへ伸ばした手首が下がるので、ロープに引き戻されて肩の痛みが強くなる。

顔を上げる気力もなく、あらためて張り直されたバケツの水に映る自分の顔と睨めっこをするのも惨めで――目を閉じていると、また眠りに引きずり込まれかけて、肩の痛みで意識を取り戻す。

それを何十回と繰り返して、ようやく黎明が訪れ、一時間ほどですっかり明るくなる。

けたたましく喇叭の音が鳴り響いて、兵隊の足音と声とが窓の外に満ちる。

給仕係の兵隊（というふうに、アンナは従卒を理解していた）がドアをノックしてから寝室に入り、十五分もすると、軍服に着替えたボス猿が姿を現わした。

「Hanappasira no tsuyoi Shirouma mo sasugani kotaetato mieruna.」

ボス猿が従卒に命じて、アンナの脚を縛っているロープをほどかせ、腕を吊っているロープを引っ張らせる。

関節の可動域を超えて腕を引き上げられ、いやおうなくアンナは立ち上がる。が、足が

痺れてまるきり感覚が無い。体重の半ばが肩にのしかかってくる。

「い……痛い。下ろして……ロープを引っ張らないで」

上体を倒した不自然な姿勢で、必死に脚を踏ん張る。

従卒がロープの端を手錠に絡めて、吊り位置を固定させた。

ボス猿は締めたばかりのベルトを引き抜いて――アンナの股間に通した。

「Sosou wo surutowa darashinai meko dana. Kanpu-masatsu de kitaete yaru.」

ベルトの両端を握って引き上げる。細身だが分厚い皮革が、アンナの股間に埋没した。

アンナの知らないことだが、日本軍においては、士官の軍装品は自弁になっている。服装規定に違反しない範囲で仕立を良くしたり細部の形状に工夫を凝らす洒落者もいた。この連隊長は、服装には無頓着だったが、帯革(ベルト)にはこだわっている。鞭としてじゅうぶんな強度と重量を持たせ、裏側は滑り止めを施していた。もちろん、女の肌を存分に痛めつけるためだ。だから、大陸で姑娘の血や脂汗や淫汁を吸い込んだベルトは、妖しい絖りすら帯びていた。

そんな凶器を股間に食い込まされて、アンナは呻いてしまう。まして、それを前後に動かされては、悲鳴を抑えられない。

「きひいいっ……痛い、痛い！　やめて。お願いだから、赦して(forgive me)……！」

処女を奪われたときにさえ言わなかった、赦しを乞う言葉をアンナは口走っていた。無数の針でもっとも鋭敏な粘膜を引っ掛かれるような鋭い痛みは、昨日の鞭打ちとも凌辱とも異なる、残酷な責めだった。

「やめて。赦して……あたしはスパイだったと認めます。だから、お願い……」

それは、不眠の一夜で到達した結論だった。すぐに殺すつもりがないのなら、そして魚雷艇の修理が完了したら皆殺しにされるのだとしたら――プライドなんか捨てて、嘘でもなんでも、猿どもの言い分をすべて認めてしまおう。そうすれば、すくなくとも拷問だけは免れる。黄色い猿ども、すくなくともボス猿がなんのためにアンナを責めているかに気づかない、無意味な結論ではあったが。

アンナの訴えには耳を貸さず、ボス猿は五分ほども『乾布摩擦』を続けて、アンナの喉が嗄れるまで悲鳴を絞り出した。とはいえ、股間が血まみれになるほどは出血させなかったのだから、それなりの手加減はしていたようだ。

ボス猿は満足すると、アンナを吊っているロープをわずかに緩めさせてから、従卒を伴って部屋から出て行った。

ようやく感覚を取り戻しかけている脚を踏みしめて、股間の熱く苦しい疼きに嗚咽しながら、アンナはつぎの拷問までのわずかな休息を屈辱とともに噛み締めるのだった。

――じきにボス猿は戻って来て、アンナに見せびらかしながらの朝食を終えると、体裁を調えた取り調べが始められた。つまり、憲兵中尉とその部下に尋問させた。

囚われて初めての、穏やかな取り調べだった。

「海図作成は軍事行動だ。おまえは民間人でありながら、その手伝いをしていたのだな？」

「はい」

「みずから進んで積極的に手伝っていたのか。なぜだ？」

「父の仕事だからです。子供が親の手伝いをするのは…」

「おまえは軍から報酬を得ていたな」

「いいえ」

「おまえは軍から報酬を得ていた。そうだな？」

「そんな事実は…」

「おまえは軍から報酬を得ていた。そうだな？」

「……はい」

「機雷を敷設する海域も、おまえと父親で決めたのか？」

「それは海軍の専門家が…」

「機雷を設置する海域を海軍の専門家が決めるにあたって、父親とおまえが助言したのだな？」

「……はい」

「機雷を設置すれば軍艦だけでなく民間の輸送船も無差別に被害を受ける。それも分かっていたな」
「味方の船には情報を伝え…」
「つまり、日本の軍艦と日本の民間船舶を狙ったのだな」
「……そうです！」
反駁には言葉をかぶせられて。アンナには、それをはね返すだけの精神力が残されていなかった。すべての質問に、ボス猿と中尉猿とが満足する答えを与えてしまった。だから――全裸で椅子に縛りつけられるよりも酷いことはされなかった。
取り調べが終わっても、アンナは解放されなかった。むしろ、そこからが本格的な拷問――いや、なにかを自白させるための責めではないから、単純に虐待というべきか。
手錠ではなく、ロープで後ろ手に縛られた。ただ手首を拘束するだけではなく、二の腕にもロープを掛けられ、乳房の上下も縛られた。アンナ自身の掌にすっぽり収まるくらいだった乳房が、ブラジャーのサイズで確実に１カップ分は縊り出された。
厳重な拘束は下半身にも及んだ。大きく開脚させられて脛をぶっ違いに重ねられ、その形で縛られた。見下ろされるのだから、肛門を犯されたときの屈辱的な姿勢よりはずっとましで、女性器の奥や肛門までは見られない。それでも、少女を羞恥のどん底へ叩きこむにはじゅうぶんな辱めだった。
性的な加虐だけではない。執務室の片隅に強制的に座らされたアンナの前に、高さ三十センチほどの小さな木箱が置かれて。そこに、茶色い泥水スープを入れた容器とライスボールが並べられた。意地悪く、スプーンとフォークとナイフが添えられていた。
「十五分以内に食べろ。食べなければ、今日は水も食事も与えないと、連隊長殿が言っておられる」
アンナは中尉猿とボス猿とを見上げ、それから木箱の上の食べ物に目を落とした。それは、アンナの概念では食事とか料理ではなく、餌にしか見えなかった。レンタイチョウの豪華な食事から推測すると、黄色い猿どもの標準的な餌よりも劣悪だろう。

一日の絶食でも、まったく空腹は感じていない。ネガティブな感情が胃袋まで満たしている。けれど、喉の渇きだけは癒したかった。

アンナはロープに締め付けられながらゆっくりと上体を倒して、容器をひっくり返さないように注意しながら泥水のスープを啜った。塩辛かったけれど、複雑な甘みが舌と喉に染み通った。半分も啜ると、猛然と空腹が襲ってきた。

アンナはライスボールにかじりついた。ライス特有の、パンやオートミールには無い粘っこい甘さが、まぶされた塩で強調されて――夢中で咀嚼して嚥下して。また泥水の塩スープを啜る。

ボス猿が中尉に向かって何か言い、それを中尉がアンナに翻訳する。

「せっかく洋食器を準備してやったのに、まるで豚か馬のように直食いするとは、さすがに流刑囚の子孫だな」

手を縛っておいて、ほかにどんな食べ方があるというのか。アンナの打ちひしがれた心の奥に埋もれていた熾火が弱々しく炎を上げた。と同時に。レンタイチョウの無知に侮蔑を覚えた。オーストラリア攻略の最前線だからという先入観からなのか、アンナをオーストラリア出身と思っている。フィリピンから撤退してきたアメリカ人と知らないのなら、軍事作戦そのもにも疎いのだろうか。襟章が星三つなら、年齢から推測して大佐だ。アンナの感覚だとものすごく偉い軍人なのに。

アンナは揶揄を無視して、中尉に訴えた。

「お願いです。水を飲ませてください」

「今、ミソシルを飲んだばかりではないか」

「このスープは塩辛くて……お願いだから、せめてコップ一杯の水を与えてください」

恵んでくださいと言いたくなる弱気をねじ伏せて、けれど『お願い(please)』を付け加えて、アンナはプライドと懇願のバランスを図った。

中尉猿は、ボス猿にお伺いを立ててから。

「午後になったら、腹いっぱい飲ませてやる。それまで辛抱しろ」

そう言って、部屋から出て行った。

目の前の木箱も片付けられて。連隊長はアンナに背を向けてデスクに座り、書類仕事を始めた。

中尉猿よりボス猿のほうが残虐だと、とっくにアンナは見極めている。だから、しつこく水を訴えて怒らせるのは避けて、緩やかな拷問に甘んじるしかなかった。

――アンナの認識は、やはり間違っていた。胡坐縛りでの放置は、拷問でも責めでもない。顎が足首に着くほど上体を折り曲げて固縛すれば、長時間の放置は命にかかわるほどの過酷な『海老責め』になるし、今の縛り方でも、前に倒すか仰向けに転がせば『座禅転がし』の羞恥責めになる。そのどちらでもないのだから、連隊長の基準では、被虐者を休ませて体力を温存させているに過ぎないのだった。

温存された体力は、午後からの尋問で絞りつくされる。

昼食は与えられなかった。アンナが思ったような単純な虐待ではない。過酷な拷問で嘔吐するのを見越しての処置だとは、分かるはずもなかった。

すでに、スパイ行為は認めている。誘導されるままに、相手の望む通りの『自白』をしている。これ以上の取り調べが必要なのかと怪訝に思ったアンナだったが。

足のロープをほどかれて、後ろ手縛りのまま、デスクの前にボス猿と向かい合って立たされた。その横に中尉猿が立つ。

「機雷を敷設した場所を教えろ」

いきなりの質問に、アンナは戸惑う。

「知りません」

「知らないはずがない。おまえは機雷を敷設する海域について、海軍に助言したと供述したぞ」

あっ……と思った。誘導尋問と分かっていながら、拷問されるのを恐れて、嘘の自白をしている。

「でも……最終的に決めたのは海軍ですから、その決定までは知りません」
　必死に頭をはたらかせて言い逃れようとしたが、通用しなかった。
「では、おまえが助言した海域でよい。どこだ？」
「……」
　フィリピンからこの島へ逃げてきて二週間と経っていない。調査のときはオシロスコープを読むだけだったから、思い描けるのは基地のある湾内の様子だけ。
「海図を見せてもらえれば、たぶん思い出せます」
　時間稼ぎのつもりだったが。即座に海図がデスクの上に広げられた。それは、厳密な意味での海図ではなかった。薄い白紙に島の輪郭が描かれただけの地図だった。陸軍なのだから、海図を持っていなくても不思議ではない――と、アンナは単純に考えた。まさか罠だとは疑いもしない。
「ここか？　それとも、この周辺か？」
　中尉が鉛筆の尻で島の周辺を指していく。
「この一帯は、船団の航行が容易だな？」
　北北西、島とフィリピンとを結ぶ線上にあって、連なる小島の間隔が広い部分に鉛筆が止まったとき、そこだと答えた。
　中尉は、地図に何も書き込まなかった。
「ここだけでは、ないだろう。監視の目を逃れるために、攻撃艦艇が島を迂回して南から接近するルートも考慮したはずだ」
　そちらも、もっともらしい海域を答えて。東西南北、いろんな場所を機雷原候補にしてしまった。
　中尉の鉛筆が、最初の海域に戻った。
「この付近の海の深さは、どれくらいだ？」
　知らないとは答えられない。機雷を敷設するのに不可欠のパラメーターだ。
「覚えていません」

中尉猿がボス猿に通訳する。

「Hum...」

ボス猿が付けペンを手にした。デスクに身を乗り出して腕を伸ばし、ペン先をアンナの乳首に突きつける。

「……！」

身を引こうとしたが、背後から両肩をつかまれた。もがこうと哀願しようと無駄だと、アンナは昨日のうちに学習している。睨みつければ相手の残虐を煽るだけとも。

アンナは歯を食い縛ってペン先を凝視することしかできない。

ペン先が乳首に触れて……

「くっ……」

アンナは悲鳴をこらえた。泣いたり叫んだり哀願すれば、かえってボス猿の残虐を引き出す。昨日の経験と少女としての本能とが、それをアンナに教えていた。

ぐううっとペン先が乳首に押し込まれる。あと数ミリも食い込めば、薄い皮膚はプツッと音を立てて破れるだろうところで、ペン先が止まった。

「このあたりの深さは？」

耳元に質問を吹き込まれて、アンナは言い逃れを重ねる。

「数値は覚えていません。戦艦が通れるだけの水深はあるけれど、機雷の繋留索がじゅうぶんに足りる深さです」

「嘘だな」

中尉猿がボス猿に何か言うと、ボス猿がデスクの抽斗を開けて本物らしい（やたらに複雑な日本の文字で書かれているので、アンナには真贋が判断できなかった）海図を取り出した。それをデスクに広げて、その上に薄い白紙の海図を重ねた。白紙に描かれた島の形は、透けて見える海図と一致している。

中尉の誘導尋問に迎合してアンナが最初に機雷原候補に挙げた海域は、赤インクで斜線が引かれていた。

「ここには珊瑚礁があって、底の浅い掃海艇でも座礁する。それくらいは、攻略前に情報をつかんでいる。こんな所に機雷を敷設するのは無意味だし不可能だ」
「……」
　いったい、この猿はなにを言っているのだろう――アンナには、この尋問が『明白な嘘』を言わせるのが目的だなどと理解できるはずもなかった。
「スパイから真実を引き出すには、拷問が必要だな」
　それだけは絶対に嫌だ。アンナは敵の作戦行動にフリーハンドを与える情報を、みずから進んで白状した。
「機雷原の候補がどこだって、大した問題じゃないでしょ。機雷も、他のいろんな物資も増援も間に合わなかった。だから、あたしたちは逃げ出したんだし、あなたたちは無血上陸できた」
　中尉猿とボス猿が短い会話を交わす。
「機雷をまだ敷設していないという自白も、極めて疑わしい。いや、嘘だ。我々を油断させようとしているな」
「あたしは聖書に誓って……」
　ガタン。
　椅子を蹴り倒してボス猿が立ち上がった。
　その音に、びくっとアンナが裸身をすくませる。
　ボス猿は抽斗から小さなケースを取り出して、新しいペン先をデスクにぶちまけた。それを両手にひとつずつ持ってアンナの横に立つ。
　中尉猿がアンナの肩をがっしりつかんで、ボス猿に正対させた。
　ふたつのペン先が双つの乳首に擬せられる。
「いやっ……！」
　反射的に身をよじるアンナ。ペン先から乳首が逃れる。
「Tema wo kaketemo tsumaran. Maruyama-chūi, chichi wo tsukande ore.」

中尉猿の手が腋の下に差し入れられ、背後から乳房をわしづかみにした。

アンナがすこしくらい身をもがいても、乳首の位置が動かなくなった。そこに、ペン先が近づいて……

チクッと鋭い痛みを感じた直後、乳首を切り裂かれるような激痛が乳房全体を突き抜けた。

「きゃあああっ……！」

アンナが絶叫する。

ボス猿が手を放しても、ペン先は乳首に突き立ったままになっている。ペンの溝を伝って、鮮血が床に滴る。

「Oi, Nishi dattana. Kisama ni meko-mame wo sawarasete yaru.」

「Meko-mame wo tsumande ugakanu youni hoji shiteiro.」

直属の上官である中尉猿からも命じられて、いそいそと子分猿がアンナの斜め前にしゃがみ込む。

「暴れるなよ。ペンを根元まで突き刺してやるぞ」

先端が $^{1}/_{8}$ インチばかり突き刺さっただけで、乳首が灼けるように熱くて痛い。１インチ以上もあるペン先をすべて突き刺されたら……痛い以前に、まっぷたつに引き裂かれてしまう。だから。子分猿が股間に手を伸ばしてきても、蹴飛ばしてやれなかった。

「ひゃうんっ……」

股間の一点に、くすぐったいような痺れるような感覚が生じて、アンナは場違いな嬌声を発してしまった。が、すぐに。不思議な感覚を生じた部位をきつく摘まれて、それは鋭い痛みに変わった。

顎を引いて見下ろすと、淡い茂みの中にピンク色の小さな突起が見えた。イボにしてはおかしいし、こういう部位があることを、猿（というよりも、男）どもは知っていた。

初めて見た突起に、ペン先が迫った。乳首よりも敏感らしい部分に、その鋭利な凶器が突き立てられようとしていることに、アンナは愕然とした。

「いやあっ……やめて！　お願い！」

「すでに機雷は敷設されているのだな？」

耳元に囁かれる言葉に、アンナはがくがくと首を振った。

「はい！」

「それは、どのあたりだ？」

「……」

答えられない。デタラメを言っても、さっきみたいに見破られる。

「Jihaku surunayo. Shita tokorode onaji dagana.」

ボス猿の言葉を理解していたら、アンナは絶望に戦慄しただろうか。それとも、憎悪を燃え上がらせただろうか。しかし現実には、そんな余裕もなく、ペン先が胯間の突起に突き立った。

乳首の痛みなどそよ風でしかない、竜巻のような圧倒的な劇痛。

「ぎゃはっ……！！」

アンナは悲鳴を喉に詰まらせて気を失った。深夜の失禁から溜まっていた尿が、弱々しく床に垂れた――だけでなく、腸に蓄積していた消化物までも。

この場合、失神はアンナにとって救済だったろう。

そして嗜虐者たちは、他愛もない羞恥責めに興じるつもりなど無いのだった。

股間のひどく鋭敏な一点に新たな鈍い痛みを感じて、アンナは意識を取り戻した。目の前にブーツが逆さまに立っていた。その下からカーキ色のズボンが垂れている。

乳首と股間がずきずき疼いているが、それよりも、頭が締め付けられるように痛かった。

(そうじゃない。あたしが逆さに……)

吊るされているのだと気づいた。

両足首を別々に縛られて、V字形に開脚させられている。

あわてて膝を閉じた。体重に加えてロープを横に引っ張る負荷が増えた分、膝にも痛み

が走った。

いったい、これから何をされるのかと怯えて。すぐに見当がついて、心臓を締めつけられるような恐怖に襲われた。頭の上に水が見えた。つまり、水を入れた大きなバケツの上で逆さ吊りにされている。あと１フィートも下げられると……

「きひいっ……！」

意識を取り戻す直前に感じた、意識を取り戻した分だけ鮮明な激痛が、股間の一点ではじけた。顎を引いてそちらに目を向けると、視界の下で腕が股間に向かって伸びていた。乳首よりも鋭敏なイボ様の突起を抓られている。

「Me wo samashita youdana. Ichiou jinnmon shite oke.」

ボス猿の声に続いて中尉猿の声が降ってくる。

「まだ機雷を敷設していないというのは、ほんとうか？」

「はい。それが真実です」

答えた直後、軽い落下感があって――顔が水中に没した。

「きゃ……」

反射的に叫びかけて、あわてて息を止めた。口の中にえぐみのある塩辛さが広がった。海水だ。

五秒、十秒……引き上げられる気配はない。

まさか、このまま溺れさせるつもりなのかと、また心臓を締めつけられる。絶対に、そうはならない。こいつらは魚雷艇が……欲しいのだろうか？　こいつらは、陸軍だ。海の戦いは任務じゃない。でも、巡洋艦や駆逐艦が常駐しないとしたら、海防の要に……

息が苦しくなって、恐怖に心を奪われて――考えがまとまらない。

不意に足首を強く引っ張られて、視界がはっきりした。

「ぷはっ……」

空気をむさぼる。

「まだ機雷を敷設していないというのは、ほんとうだな？」

「はい。お願いですから、信じてください」

憐れみを求める口調になっていることに、アンナは気づかない。

ふたたび、水の中に落とされた。今度は落下を感じた瞬間に大きく息を吸っていたから、しばらくは冷静でいられた。

いっそのこと、実は機雷を敷設していると答えてみようかとも思った。それが、彼らの求めている答なのかもしれない。いや、駄目だ。敷設海域を尋ねられて、またボロを出す。そしたら、もっと酷い目に（それがどんなものか想像もつかないけれど）遭わされる。

今度は、なかなか引き上げられない。息をすこしずつ吐き出してみようか。限界だと判断するかもしれない。でも、吐き出しただけ苦しくなる。

股間に、それまでとは異質の突き刺すような激痛を感じて、アンナは水中に悲鳴を噴きこぼした。反射的に腰を引いて、全身が釣り上げられた魚のように跳ねた。

激痛の正体が分からないでいるうちに、右の乳房にも同じ衝撃が奔った。さらに、左にも。激痛のたびに、全身が跳ねる。

ざばあっと水から引き上げられて。アンナは激しく咳き込んだ。ごぶっと水を吐いた。肺にまで吸い込んでしまったらしい。胸の奥に灼熱感が激しい。

誰も手当てをしてくれないし、宙吊りのまま。

たっぷり五分はかけて、ようやく咳が治まり、鼻水や涙も止まって。ずっと目の前に立っている影に目をやる余裕ができた。

ボス猿は葉巻を手にしている。目を落とすと、乳房に赤い痣が出来ていた。痣ではない。葉巻の火に焼かれて皮膚をえぐられていた。

（あの葉巻は……）

見覚えがあった。補給部隊長のテイラー少佐が愛用していた葉巻だ。戦利品。火傷の痛みに加えて、味方の銃で射たれたような屈辱まで覚えた――のは、一瞬。

ボス猿が立て続けに葉巻を吹かすと、それを股間に近づけた。

「やめて！　機雷なんか敷設していません。ほんとうです。だから……ぎゃはあっ！」

灼熱と鋭い激痛とが股間で爆発した。

「Rentaichō-dono. Tsukaimono ni naranaku narimasuyo. Kono Shirouma ni tottewa soremo jihi desyouga.」

「Hum... Amarini goujou nanode netsu ga haitte shimatta.」

中尉がきな臭い顔をした。

「Sou desyouka? Watashi niwa sukkari kuppuku shita youni miemashitaga.」

「Amai na. Purīzu nado ketou no kan'youku ni sugin. Koitsu no kuchou wa rettou-jinshu ni meirei suru hakujin no soreda. Kūnyan no kobi-hetsurai towa konponteki ni chigau.」

二匹が話しているあいだ、アンナは火傷の激痛と水を吸い込んだ肺の灼熱とに呻吟していたが……会話が途切れると、また何かされるに違いないと怯えてしまう。

「水を飲みたいと言っていたな。満足したかね」

「……」

アンナは返事をしなかった。反発を感じたのもたしかだが、どう答えても悪い結果しか招かないという予感があった。ノーと答えれば、もっと飲ませてやろうと言う（だけでなく実行する）だろうし、イエスと答えたところで……また、機雷原に関する質問が蒸し返されて、もっと酷い拷問が始まるかもしれない。

そんなふうに先まで読んでしまって、迎合でも屈従でも、この瞬間の苦痛だけを切り抜けようとはしないのが、連隊長の言う姑娘との違いなのだが。アンナは気づかない。気づいたとしても、そこまで自分を堕としはしなかっただろう。

「Naruhodo, goujou desuna. Oi, tsuzukero.」

中尉の言葉を受けて、アンナの見立てでは二匹の子分猿、憲兵伍長と従卒が、それぞれ握っているロープを緩めた。

アンナの顔が、みたび水中に没する。

葉巻がいつ身体に押しつけられるかと、むしろそちらに怯えていたアンナだっかたが。

なにごとも起きず、比較的短い時間でアンナは引き上げられ、しかし呼吸を整える間もなく、また水に沈められた。それが何回か続けられて。ふたたびアンナが水を吸い込んで、今度は気を失いかける。

咳が弱々しい。水を吐き出せずに苦しんでいる。

ようやく、アンナは床に放り出された。中尉が背中を長靴で蹴って、それが乱暴きわまりない人工呼吸となって、息を吹き返した。

髪の毛をつかまれて、アンナは強引に立ち上がらされた。後ろ手錠に長いロープがつながれ、股間を通して前へ引っ張られる。しかし、ロープが食い込むささやかな痛みから逃れようと、前へ足を運ぶ気力すら失われていた。ボス猿がいっそう強くロープを引っ張り、それでも動かないでいると後ろから尻を蹴飛ばされた。中尉に乳房をわしづかみにされて前へ引っ張られ、よろよろと前へ進み始めた。

そのまま、執務室から引きずり出される。股間をくぐるロープをボス猿に引かれて、中尉と子分猿が後ろにつく。足が止まると尻を蹴飛ばされ、転びかけると横合いから中尉に乳房をつかまれて支えられる。

アンナが連行されたのは指揮棟の裏側だった。大きな木箱が横倒しになっていた。何を梱包していた箱かは分からないが、U. S. Navy の刻印が焼き付けられている。底も側面も、木材が一枚おきに取り外されて素通しになっている。

その箱に、アンナは後ろ手錠のまま押し込められた。箱が転がされて、上から、やはり素通しになった蓋をかぶせられた。

箱は人間を閉じ込められるだけの「狭さ」があった。箱の長辺にそって脚を投げ出し、側面に背中を凭せかければ、そんなに窮屈ではない。もちろん立ち上がれない。

「今日から、これがおまえの独房だ」

ボス猿の言葉を中尉が無表情に翻訳した。

「戦時捕虜の男どもと違って、日差しも風通しも抜群で、しかも個室だ。連中に約束した通りの快適な環境だぞ」

「……」

「そうだ、忘れるところだった」

蓋がずらされて、片隅にバケツが置かれた。半分くらいまで砂がはいっている。

「おまえ専用のトイレだ。ひっくり返すなよ」

うんと背中を丸めて中腰になれば、バケツをまたぐというよりも、その上に座れないでもない。けれど、両手を拘束されているから、後始末ができない。

「Te no suiteiru hei wa oranka. Nimei da.」

中尉が呼ばわったが、返事は無かった。連隊長が同じことを怒鳴って、しぶしぶといった顔で二名の兵隊が姿を現わした。憲兵や偉いさんに呼びつけられて、喜んで馳せ参じる兵などいない。しかし、この二名は、憲兵中尉の命令を聞いて、たちまち表情を、引き締めるのと緩めるのとを同時にしてのけた。

「Hai! kono horyo wo miharu de arimasu!」

「Me no hoyou madedazo. Te wa dasunayo. Mochiron ashi moda.」

二匹の下っ端猿が相好を崩している理由が、アンナには分らなかったのだが。ボス猿たちが立ち去っても、新手の二匹は小銃を身体の前に突いて檻の左右に直立不動なのを見れば理解せざるを得なかった。

動物の前で人間がどう振る舞おうとかまわないのだと自分に言い聞かせても、前かがみになって脚を縮めて、裸をすこしでも隠そうとしてしまう。傷つけられた乳房と股間の鋭い疼き、喉の奥と肺に残るひりつき。その上におおいかぶさる羞恥の感情。二日前だったら、それだけで気が狂いそうになっていただろう環境を、アンナは耐え忍ぶしかないのだった。

――見張の兵は二時間おきくらいで交代して。南洋の高い陽射しもじりじりと傾いて、やがて夕暮れが忍び寄る。

木の檻の隙間に板が渡されて、その上に小さな洗面器が乗せられた。泥のような塩辛いミソシルに炊いた米と得体のしれない葉っぱと身の部分を齧り取られた焼き魚の骨とが混

ざり合った――簡潔に表現すれば残飯だった。

食べれば時間の経過とともに消化物となって、つまりは砂の入ったバケツをまたがなければならない。それなのに、残飯がすごくおいしそうに見えてしまう。

（食べるもんか。一か月くらい絶食しても、人間は死なない）

アンナは空腹を気力でねじ伏せようとした。

（悔しいけれど……水だけは、いやっていうほど飲まされたんだから）

海水をたらふく飲まされて喉がひりついているのだから、痩せ我慢もいいところだった。しかし、嗜虐者たちは痩せ我慢すら許さなかった。

中尉猿が見回りに来て、洗面器の中身が減っていないのを見ると、見張の兵に声をかけた。命令口調の後で、言葉をやわらげる。

「Syokuji no aida wa kamawan. Omae-tachi de horyo no karada wo hoji shite yare. Jakkan no yarisugi niwa me wo tsumutte yaru.」

「Hai!」

下っ端猿どもは、見張を命じられたときよりも張り切った声で返事をして。檻の蓋を開けて、ひとりが身を乗り出してきた。アンナの脚をつかんで、張り渡した板の下に押し込もうとする。もうひとりが檻の横から手を突っ込み乳房をつかんで、アンナの動きを封じる。

「やめさせてください。言葉で言えば、従います」

中尉猿に抗議したが、まるきり無視された。

アンナは頭を押し下げられて、膝の上５インチほどの高さにある洗面器に顔を突っ込まれた。目の焦点が合わない近さに残飯が迫り、顎から鼻までが残飯に沈んだ。そのまま、押さえ続けられる。

残飯に溺れないためには、食べてしまうしかない。アンナは観念して口を開け、残飯を啜り込んだ。そのままでは喉につかえて飲み込めないので、大急ぎで咀嚼した。

アンナの頭を押さえている下っ端猿が、片手で太腿をまさぐる。どころか、股間にまで

手を突っ込んできた。

アンナは力いっぱいに腿を閉じ合わせたが、指先が火傷の部分にまで侵入する。

「ぐぶうううう……」

アンナはいっそう身体を硬直させて、残飯の中に苦悶を噴いた。

「Sore wa sasugani yarisugi da. Ketsu kurai de gaman shite oke.」

中尉が止めなければ、指はもっと奥まで挿れられていただろう。太腿から掌が滑って、尻を撫でまわし始めた。

アンナにも、中尉が制止してくれたのは分かった。悪ふざけをけしかけた張本人にしては、不可解な行為だった。もしかしたら、火傷に配慮してくれたのかもしれない。もちろん、感謝なんかしないけれど。

苦痛が去って、おぞましさだけが残った。それは無視しようと、アンナは努める。

(猿どもに懐かれて身体を触られているんだと思えば……嫌よ！)

内心の叫びも封じて、アンナは洗面器の中身をがっつくようにして平らげた。魚の骨だけは吐き出したけれど。

強制給餌が終わっても、数分間は押さえつけられていた。触られ続けた。

「Sorekurai de yamete oke.」

中尉猿の苦笑交じりの叱咤で、ようやく解放された。のではなかった。顔をあお向かされて、べったり付着している残飯を舐め取られた。薄汚いペニスで口中を犯される以上に不快だった。

(獣は人間の顔を舐めるけど、人間は獣の顔を舐めたりしない)

そう考えても、汚辱にまみれたプライドは取り戻せなかった。自分が黄色い猿のペニスを舐めさせられた（なんてものじゃなかった……）ことを、ますます思い出して、嚥下したばかりの残飯を吐きそうになっただけだった。

兵隊が腰に提げていた水筒の水を口移しで飲まされて――これだけは、嫌悪よりも喜びがうわまわった。そんな自分が情けなくなったけれども。

そんな、肉体の激痛を伴わない凌辱もついには終わって。やがて、気が遠くなるほど長い一夜が訪れる。

見張は周囲よりも檻の中を注視しているので、わずかに楽な姿勢を取ることもできなかった。

昨夜はほとんど眠れなかったうえに、今日の拷問で体力も気力も消耗しているので、自然と眠りに引きずり込まれる。そして、じきに尿意に眠りを妨げられる。そんな惨めな循環を何度か繰り返して、明け方近くになって、ようやくアンナはバケツをまたいだ。見ている二匹は劣等人種だ、いや下等動物だと虚勢で蔑んでも、羞恥に打ちのめされた。

それなのに、生理的欲求を解消すると、いつのまにか深い眠りに引きずり込まれていったのだった。

翌朝は、見張の兵隊に起こされるまで眠りを貪っていた。声を掛けられたくらいでは目覚めないくらいに深く眠っていたのだが、股間に手を突っ込まれて奥まで指でこねくられて――濡れているのを自覚したくらいだから、しばらくは弄ばれていたのかもしれない。

目覚めると、すぐに細長い木の板のテーブルが膝の上に通されて、二つの小さな洗面器にはいった餌と水をあてがわれた。餌は昨日と同じで、ミソシルをぶっ掛けた残飯だった。

餌を拒んでも、昨日のように無理強いされる。アンナは素直に水を飲み、餌にも顔を突っ込んだ。たっぷりの水でのどを潤した後だと、塩辛いスープもそれなりに美味だった。

駆逐艦で過ごした一夜を合わせると、捕虜になって四日目。惨めな環境にも順応し始めたと自覚して、アンナは大きな悲しみと小さな怒りとを感じるのだった。

しばらくすると、檻から３０フィートほど離れた場所で十人以上の兵隊が土を掘り始めた。始めたのではない。すでに大きな穴になっている。昨日は気づかなかっただけだ。兵隊たちは掘った土を外へ運び出し、分厚い木の板や太い杭を穴へ運び入れている。

防空壕(Shelter)を作っているのだとアンナは見当をつけた。兵隊たちは重労働を苦にしていないようだった。なにしろ、わざわざ遠回りして檻の前を横切り、三十秒くらいは立ち止まっ

て、アンナの裸身を視姦する愉しみがあるのだから。

縮こまっていると筋肉が凝り固まって疲れるので、アンナは背を檻に凭せかけて脚を投げ出した楽な姿勢で、無防備に裸体を曝していた。相手は猿だから平気だと強がっているのではなく、ただ無気力なだけだった。

しかし、嫌でも羞恥心を甦らせねばならなくなった。

陽の高さからして正午ちかくになって、ブキャナンが連れてこられたのだった。正確には、彼が先頭を歩き、その後を中尉とボス猿が追いかける形だった。

「なんてことだ！」

アンナの姿を見るなり、ブキャナンが怒鳴った。

「約束が違う。彼女を捕虜ではなくレディとして扱うと、きさまは言ったぞ」

「捕虜ではない。スパイの容疑者だ。そして、レディとして男たちの目を楽しませてもらっている」

ブキャナンが右手を握りしめるのが、アンナからも見えた。

「三日目になっても、魚雷艇の修理はまったく進んでいないではないか。我が軍の工兵が修理した艇体を壊しているように見えたぞ」

「説明したはずだ。釘で穴だらけだった。あれでは水密になっていない。やっつけ仕事の板を剥がして、接着剤とパテで貼り直したのだ。配線と配管の修復も、ちゃんと進めている」

「魚雷艇が走るようになれば、おまえの言葉を信用する。それまでは、我々も態度を保留する」

ブキャナンは中尉とボス猿とを交互に睨みつけていたが、ふっと息を吐いた。右の拳からも力が抜けた。アンナに近寄り、音を立てて両手を檻の上に置いた。

顔を背けていたアンナだったが、思わず見上げた。目の前にブキャナンの右手があった。人差し指と中指をクロスさせている。

「ソープオペラのヒロインも、ここまで辱められはしない。しかし俺たちには、どうする

こともできない」
　ぱしっと弾くような勢いで、クロスさせていた指を元に戻した。
「とにかく生き永らえろ。魚雷艇を修復すれば、何もかも好転するはずだ」
　ブキャナンは体を起こしてボス猿たちに向き直った。
「整備棟へ戻る。断わっておくが、彼女を虐待したら**魚雷艇**はきさまらの物にはならんぞ」
　中尉が通訳すると、ボス猿がせせら嗤った。
「魚雷艇が無くても、我が軍の装備は充実している。それを忘れないようにな」
　ブキャナンは、力なく頭を横に振っただけだった。まったく彼らしくない仕種だった。
　――ブキャナンを見送ってから、アンナは彼の言葉に隠された意味を考えた。場違いなソープオペラを持ち出したのは、一昨日と同じだ。指をクロスさせたのだから、今言っていること、どうすることもできないというのは嘘だと伝えたかったのだ。そして――魚雷艇を修理したら何もかも好転するというのは、嘘ではない。すくなくとも、ブキャナンさんは、そう信じている。ジャップどもがあたしへの扱いを変えると、本気で思っているのだろうか。いや……いつものように『ベニヤ船』とか『ＰＴ』とか言わずに、魚雷艇と正しく発音した。そこに重点を置いた。
　もしかすると……修理した魚雷艇を分捕って（元々、自分たちの物だけど）逃げ出すつもりなのかもしれないと、アンナは推測した。どうやって彼女を救出するのかは分からないけれど。海へ逃げてしまえば、ジャップどもが揚陸に使っていた非力なエンジンを積んだ筏なんかじゃ追いつけない。
　きっと、そうだ。アンナは希望を見い出した。だらしなく投げ出していた脚を身体に引きつけて、その上に身を伏せた。

　午後になって、さらにアンナを勇気づける事件が起きた。カタリナ飛行艇が三機編隊で爆撃を敢行したのだ。ただし、アンナが鼓舞されていたのはせいぜい十五分くらいだった。

爆弾は基地を遠く逸れて、ジャングルに落ちた。巻き添えを食ってもいいから、ボス猿の居座っている指揮棟を直撃してほしかったのに。

　けれど、ジャップどもは金玉を縮み上がらせたに違いない。その日は、拷問も輪姦もされずに終わったのだから。